展　示　報　告

地　域　展「伝　説　の　さ　と　鹿　角」

Ⅰ　準備経過について

1　はじめに

昭和53年1月4日から7月9日までの6か月あまりにわたり、「伝説のさと鹿角」というタイトルで、鹿角を紹介する地域展が行われている。この展示は、秋田を人文、自然の両面から総合的に研究し、展示することによって、郷土の過去を学び、その未来を考える場を提供するという、当館設立の構想にもとづいて実施した展示である。

今回の地域展は、当館にとって初めての経験であり、すべてが創作であったと言ってもよい。それだけに、調査研究の進め方、展示のあり方など、検討しなければならない幾多の問題をはらんでいる。このような事情から、これまでの準備経過を紹介し、今後の参考に供したいと考えてこの報告をまとめた。

2　地域展が決まるまで

当博物館の開設準備を進めるにあたり、研究活動に関するプロジェクトチームを設け、1）郷土学研究に関する企画と運営、2）オープニングのテーマ展示「菅江真澄と秋田の風土」に関する調査研究の推進および展示の総括、3）開館後のテーマ展示と、それに関連する調査研究計画の立案、4）委託研究事業の推進　等の仕事を行っている。今回実施した地域展は、基本的には、このプロジェクトチームが昭和49年度に企画し、立案した事業である。

当時、開館後のテーマ展示と研究活動を企画するにあたって、その出発点となったのは、オープニングのテーマ展示に対する反省であった。その内容についてはすでに報告しているが、その要点をあげると、菅江真澄の研究は、全部門が参加して秋田の特色を探究する素材としては、かならずしも適当とは言えない。特に自然科学的な面では、真澄にこだわっているかぎり、研究らしい仕事は進まない。人文、自然の両面から総合的に秋田を探究し、その成果を展示するという趣旨を生かすには、むしろ真澄とは別に研究課題を決めるか、あるいは地域を指定して、全部門が参加し、協力しあって調査研究を進めるのが望ましいということであった。この反省にもとづいて、50年以降のテーマ展示とその裏付としての調査研究は、次の2つのスタイルで進めることに決めた。

① 課題研究とテーマ展示

これは、「酒づくりと秋田」「勝平得之と秋田」のように、最初に「展示テーマ」＝「研究テーマ」を決め、いくつかの部門が共同で調査研究を行ない、その成果にもとづいて展示を構成する。

② 地域研究と地域展

特定地域を選んで、全部門が参加し、協力しあって調査研究を行ない、その成果にもとづいて、地域を紹介する展示（地域展）を実施する。

このようにして、これまで続けて来た「菅江真澄と秋田の風土」は、課題研究の一つとして残し、あらたに地域展を前提とする地域研究に取り組むことになった。

3　研究計画の推移と鹿角展

地域研究の計画を作成するにあたって考慮した基本的な考えは、1）テーマ展示を進めるための事前研究であること。2）地域を対象とした総合学術調査とすること。3）博物館の職員だけでなく、広く研究者を募り、文化事業として進める。4）この事業を継続的に実施することによって、県内の資料を計画的に調査し、収集し、展示に活用して行くとともに恒久的な保存を図るということだった。このような考えにもとづいて最初に示した

のが次の案である。

第１次案　（1974.９.２）

研究目的　共同体の解明

展示計画　昭和52年度展示：米代川流域についての総合的な調査研究の成果を展示する

昭和54年度展示：雄物川流域について　〃　〃

昭和56年度展示：子吉川流域について　〃　〃

昭和58年度展示：秋田との関連および対比を中心に隣県資料の展示をする

昭和60年度展示：秋田のまとめとして総合的な展示を実施する。

研究組織　博物館の学芸職員全員と館外研究家で総合学術調査の組織をつくる。

この案に対し、１）地域展の目的として「共同体の解明」だけでは不足である。２）米代川流域全体では範囲が広すぎて、２年間の調査研究で展示することは不可能である。などの意見があり、さらに検討を重ねてまとめたのが次の案である。

第２次案　（1974.10.７）

研究目的　秋田の過去と現在の姿を人文、自然の両面から総合的に調査し、研究する。

展示計画　①十和田地域　②横手盆地　③日本海岸とし、それぞれの調査研究期間を４年とする。２年目に資料紹介展を行ない、４年目に郷土学的な総合展示を実施する。

研究組織　学芸課全員の共同研究とし、館外研究家をも加えて総合的に調査研究を進める。

この方針を具体化するという形でまとめたのが次の計画である。

第３次案　（1975.１.27）

①　地域研究の目的

愛郷心はより良く郷土を理解することによって深められるという前提にたって、１）地域の自然と社会のかかわりあいやおいたちを探究することによって、郷土の風土的特色とその価値を明らかにし、２）展示することによって、郷土を学び郷土を考える学習の場を提供する。３）さらに、この事業を継続することによって県内の資料を計画的に調査し、収集し、恒久的な保存と活用を図る。

②　研究地域。第一回目の地域展は鹿角地域とする

この地域を選んだ理由は、１）開館時点における館内の展示内容を見ると、他の地域に比較して、鹿角の資料が少ない。それは、開館日程の中で鹿角の資料を十分に検討する時間的な余裕がなかったためで、これを機会に鹿角を取り上げ、調査研究を進めることによって、展示資料の充実を図りたい。２）鹿角は秋田県の北部にあり、しかも奥羽山脈の一角をなす盆地であり内陸的な気候要素を持っている。また十和田湖の、噴火による火山灰に厚くおおわれているなど自然環境としても県内では特異な地域である。３）鹿角は、大湯環状列石、大日堂舞楽、十和田湖伝説など多くの文化遺産にめぐまれ、歴史的に南部藩であった。しかも太平洋側の影響が大きい地域で、文化的にも特色の多い地域である。このように特色のある地域を最初に取りあげて地域展を行うことは、今後の計画を進めるうえに役立つことが多いと考えられる。

③　研究と展示の進め方

昭和50―51年を基礎研究の期間とし、その成果にもとづいて　昭和52年４月から鹿角資料展を行なう。

昭和52―53年を綜合研究の期間とし、その成果にもとづいて　昭和54年４月から鹿角の綜合展示を行なう。

④　基礎研究の進め方

この期間は、郷土学的な綜合研究を行なうための基礎資料を収集する期間とする。その進め方は各部門が自主的に計画をたてて実施することとし、次のような調査項目が確認された。

イ、自然環境に関する基礎的研究

生物部門：動植物のファウナ、フローラの調査と生物社会的研究

地質部門：第三系地質層序の検討と第四系に関する調査・研究

ロ、　集落に関する基礎的研究

民俗部門：社会組織を中心に、年中行事、口承文芸、信仰、生産と労働、民具、民俗芸能等の調査

歴史部門：集落の形成に関する文献資料を調査する。特に町と村の関係を扱う。

考古部門：遺跡、遺物の分布と編年についての調査し、古代における集落についてもふれる。

地　　理：地理的に見た集落の形態、地形、交通、産業と集落の関係について調査する。

ハ、諸文化に関する基礎的研究

美術部門：鹿角画人についての調査

工芸部門：鹿角の工芸についての調査

美術・工芸・民俗が協力して民具民芸品の研究を進めてはどうか、（提案）

美術・工芸・歴史が協力して、鹿角学統と遺品についての調査・研究ができないだろうか（提案）

⑤　昭和50年度の調査研究日程案

３月中に各部門ごとに調査研究活動の構想をつくり、これをまとめて全体の活動方針を決める。４月には全体の計画を完成し、研究組織をつくる。５月には文献資料リストを完成し、調査収集等の委託業務を完了して、６月には研究活動を全面的にスタートさせる。９月と２月には調査研究の中間報告会を開いて全体討議を行ない次年度の方針をたてる。

以上の計画を作成して、年度予算の成り行きを待ったが、結局見合う予算がつかなかったために、この計画を白紙に返し、担当をかえて、もう一度考え直してみようということで、①「鹿角」範囲は十和田湖から湯瀬までとし、テーマは火山灰と南部要素とする。②「鳥海山」範囲は由利原としテーマは草原とする。③「大沢郷」テーマは「さと」とするという案だった。これらについて話し合った結果、「鹿角」を取り上げることが再確認され、さらに研究の進め方は、昭和50年１月27日の案によるということで、一度白紙に返した第３次案が、そのまま復活された形で鹿角展が決定され、その準備を進めることになった。

4　調査研究活動の経過

昭和50年度の鹿角展に関する調査研究活動は次表の通りである。

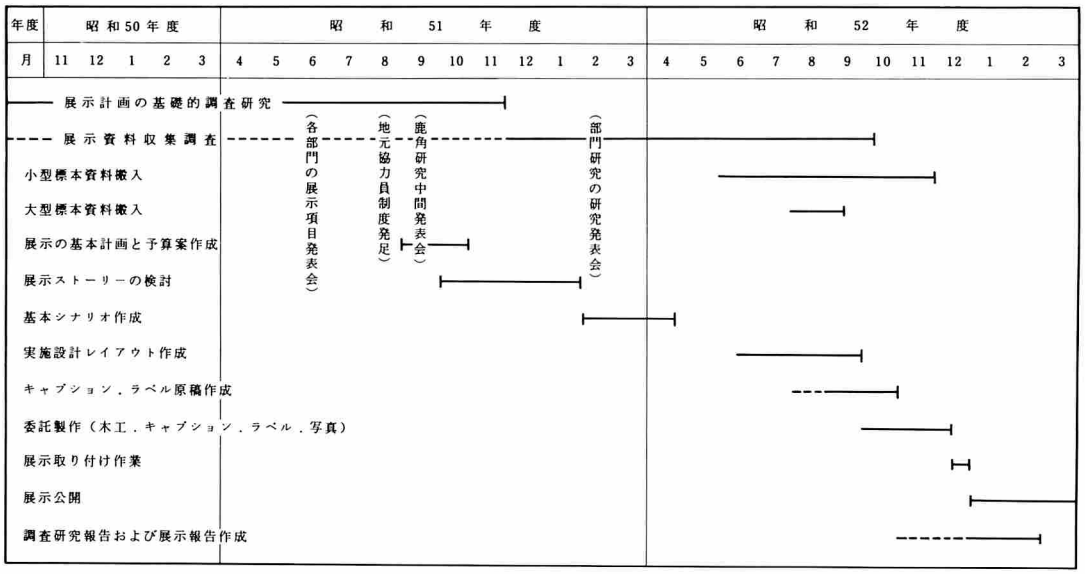
部門	部門別調査研究項目	調査研究活動年間計画	昭和50年度の成果と反省
歴史	○中世から近世にかけての集落、新田開発、入会地、近世の商品流通等に関する資料調査。 ○中世館址の現地調査	6 7 8 9 10 11 12 1 2 3 文献調査→資料調査→まとめ→	○南部叢書、岩手県史、鹿角の郷土史の調査、花輪公民館その他現存文書の調査を行なう。 ○館、城の文献調査および分布調査を行ない南北朝期のもの５、戦国期のもの50を確認
考古	○遺跡の位置と自然条件を現地を回って確認する	現地調査→まとめ→	○遺跡・遺物の分布を確認して回ったが、鹿角は遺跡が多く、全部を確認することは大変である。
民俗	○既刊文献を調査し整理する ○調査項目、地域、調査方法等具体的な細案をつくる。	文献調査→予備調査→細案作成→	○地元有識者を訪問し八郎太郎伝説記録確認 ○民俗資料の所在調査を行ったが、全地域の基礎調査は不可能。小範囲に、他部門との関連でテーマを決めたい。
生物	○鹿角地方の植生とフローラの研究 ○鹿角地方の昆虫相の研究	標本採集→室内作業→まとめ→	○鹿角地方の植生と蛾相を調査し、その輪郭を把握、多少の標本を製作、テーマの端緒を得た。通年調査はできず８月で終る。
地質	○鹿角盆地の形成史について文献調査を行ない、現地の予察をする。	文献調査→現地予察→室内作業→まとめ→	○文献、地質図等による基本調査が終り、展示項目を一応まとめる。 ○基盤岩、化石、火山灰、段丘の予察をする。

地域展「伝説のさと鹿角」

部門	部門別調査研究項目	調査研究活動年間計画	昭和50年度の成果と反省
美	○鹿角画人の調査研究	←文献・現地調査→	○鹿角画人として川口月嶺と柴田春光を調査
工	○鹿角地方の工芸品調査	←文献・現地調査→	○絵馬、木彫人形、陶芸関係の調査をする

以上の調査研究の成果にもとづいて、51年度以降展示までの諸準備を進めてきたが、その経過は次の通りである。

地域研究「伝説のさと鹿角」準備経過



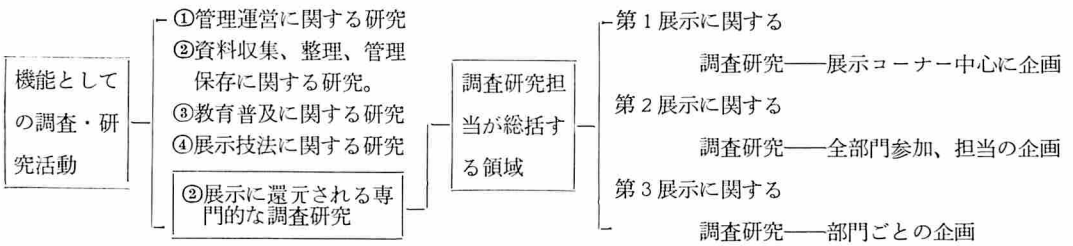
昭和51年度以降の調査研究活動の大きい特長は、これまで各部門の計画で自由に進めてきた活動を、展示計画にもとづいて必要事項を調査するというように改めたことと、調査研究活動の体制づくりをしたことである。

① 展示のための調査研究

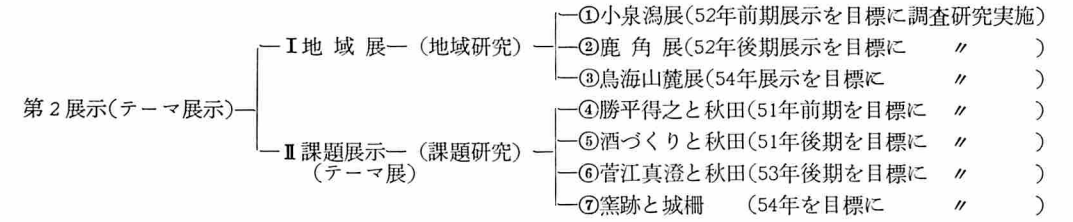
昭和50年1月にまとめた鹿角調査研究計画（第3次案）は、総合学術調査という大がかりな事業の推進プランであったが、これを館内職員だけで進める地域展にそのままあてはめたことに無理がある。その顕著な問題が展示のサイクルで、2年目に基礎資料紹介展、4年後に綜合展示を行なうという考えである。総合学術調査会という大規模組織で進める事業では当然と思われた計画も、10人そこそこで進める仕事には通用しない。まして2年後に同じ地域の展示を繰り返すことは、現実問題として不可能なことは論をまたない。そこで、4年後の綜合展示は考えないことを前提として、昭和52年度に実施する展示は、基礎資料の紹介に終らず、できるかぎり、総合的な内容のある展示にしようという提案をし、おおかたの賛成を得た。この方針にもとづいて、昭和51年度以降の調査研究活動は、すべて展示の準備作業として進めることとした。

② 担当領域と鹿角展

調査研究のあり方について、調査研究活動は博物館の機能であり、調査研究領域という表現はおかしいという論がしばしば出た。そこで調査研究担当のなすべき仕事を明確にしておく必要から、博物館における調査研究活動の考え方を次のようにまとめた。



このように整理すると、調査研究担当に果せられた最大の仕事は、第二展示に関する調査研究の企画と運営ということになる。そこで、第二展示に関する研究組織を示すと次のようになる。



この表からもわかるように、50年度は主として51年度に展示を予定しているテーマ④・⑤についての調査に主力が注がれ、鹿角展については51年度以降に本格的な取り組みをしたと言ってもよい。

5 総合的な展示への試み

展示計画を作成するにあたり、基礎資料の紹介に終らず、できるだけ総合的にまとまりのある展示にしようという方針を決めた。このように決まると、これまで各部門が自由に進めていた内容では、展示として過不足ができる。この点については、まず展示計画を作り、計画からみて必要なものは補充するという方法で、展示をまとめようということにした。

展示計画の進め方は、最初に全体のストーリーを考え、このストーリーにもとづいて基本シナリオを作成し、さらに実施設計を作るという順で準備作業を進めた。その経過を紹介する資料として、次の表を載せる。

展示計画作成資料抜粋

部門別展示項目 1976.6		展示計画 第4次案 1977.3			実施シナリオ展示項目 1977.10
歴史	1 秋田の中世城館	1 鹿角展	担当	←	1 説伝のさと鹿角
	2 鹿角の集落	(鹿角の自然と人びと)			2 鹿角盆地と十和田湖
	3 鹿角の入会場(地)	2 気候と生物	(生物		①鹿角盆地ができるまで
	4 鹿角の商品流通	①植生に見る鹿角の特徴	地質)		・大陸時代 ・海盆の形 ・十和田湖の噴火
考古	1 十和田湖の火山活動と遺跡	②草原の四季		(8へ)	②十和田湖の噴火と鹿角の地形
	・大湯環状列石と周辺の遺跡	③気温と植生と蛾相			・十和田湖ができるまで ・十和田火山灰と段丘
		3 十和田湖と鹿角のおいたち			③十和田湖の噴火と伝説
	2 鹿角の館	①鹿角盆地ができるまで			・八郎太郎の伝説 ・伝説となったシラス洪水
					3 発掘された鹿角
					①環状列石
					・配石遺構の分布・組石と土こう

部門別展示項目　1976.6	展示ストーリー第4次案1977.3		実施シナリオ展示項目 1977.10
3 鹿角の石仏	②十和田湖の噴火と鹿角の段丘地形	(地質 古 俗 史 考 民 歴)	②大湯式土器 • 東北縄文後期前半の土器文化と大湯式土器 ③鹿角の遺跡と遺物 • 縄文から古墳まで　• 竪穴住居址と大湯浮石層
民俗 1 鹿角マタギ • マタギ用具と習俗 • マタギ部落と狩場 • マタギの系譜 • 定六伝説と老犬神社 2 鹿角の伝承文化	③鹿角の遺跡と遺物 ④シラス洪水と十和田湖伝説 ⑤館と集落		4 館と集落 • 鹿角の館と集落　• 小枝指館発掘資料　• 元西城
生物 1 鹿角地方の植物 • 秋田岩手のフローラの違い • 放牧地の植物 • 自然林とシラカバ 2 鹿角の昆虫 • 全国的分布から見た鹿角の蛾相 • 雪積量と蝶蛾相	⑥石仏と鹿角の中世 4 鹿角の生活と文化 ①村の生産とくらし ②町のくらし ③鹿角マタギ ④伝承文化と大日堂	(歴史 民俗 美術 工芸 生物)	5 信仰と伝承 ①中世の信仰 • 恩徳寺弥陀三尊立像　• 小豆沢の三尊石 • 谷内の磨崖仏と板碑 ②大日堂舞楽とダンブリ長者伝説 6 村と町 ①村のくらし • シラス台地と畑作　• 錦木塚とせば布 ②町のくらし • 新給人　• 商品流通 ③鹿角マタギ • マタギ文書と狩猟用具 • 定六伝説　• 狩猟動物
地質 1 鹿角のおいたち • 鹿角の基盤岩類 • グリーンタフ活動 • 鹿角盆地と十和田湖 2 鹿角の鉱山と温泉 • 鹿角の鉱山 • 温泉と地熱発電	⑤鹿角の工芸 ⑥鹿角の画人 ⑦鹿角の文化を支えた人びと		7 鉱山 • 鉱山の分布と開発史 • 鉱山伝説 • 作業用具と絵巻　• 鉱石標本 • 坑道模型 8 気候と生物 • 鹿角の植物　• 気候と昆虫相
美術 1 鹿角の画人 • 川口月嶺とその門人	5 鉱山と鹿角 ①鉱山の分布と開発史 ②鉱山とくらし	(民俗 地質 歴史)	9 豊かな自然とふるさと • 鉱山、温泉、地熱発電 • 農水産資源　• 十和田八幡平の自然 • 民俗行事　• 鹿角の交通と未来
工芸 1 鹿角の染色と織物 • 紫根染　• 茜染 • 藍染　• せば布			10鹿角の工芸 • 人形　• 陶芸　• 染色と織物 11鹿角の美術 • 川口月嶺とその門人　• 福田豊四郎と作品

上の部門別展示項目は、1976年6月に調査研究の中間報告としてまとめたもので、調査研究計画、ねらいと調査事項、展示計画、予想される項目と内容、資料を一覧表にした表の中から、予想される展示項目だけを抜き出したものである。その内容を見ると、表からもわかるように、全体としてのまとまりや考えの統一がないばかり

か内容的に他の部門とダブっているのも見られる。そこでこれらを調整しながら、展示全体のストーリーを考える作業を始めた。

ストーリーを作成するにあたって考慮したことは、1）各部門の成果を生かしながら全体として筋が通っていること。2）いくつかの部門の項目をまとめて1つのテーマを作り、部門が協力し合いながら展示を構成する。言いかえれば、基本構想の綜合的な展示ができるように構成すること。3）全体の構成から見て必要な項目を補充するということであった。この考えにもとづいて、次つぎに試案を作り、課員全体で検討するという作業を続けた。下の表は、これら試案の大項を並べて比較したものである。

展示計画1次案（1976.10）	展示計画2次案1977.1	展示計画3次案　1977.2	展示計画4次案　1977.3
1鹿角の気候と生物 2十和田火山と鹿角の地形 3鹿角の遺跡と遺物 4シラス洪水と十和田湖伝説 5鹿角の館と集落 6鹿角の文化 7鉱山と鹿角	1鹿角展（導入部） 2気候と生物 3十和田湖と鹿角 4館と石造遺物 5集落と生活・文化 6鹿角の美術 7鉱山と鹿角	1鹿角展（自然と人びと） 2気候と生物 3十和田湖と鹿角のおいたち 4生活と文化 5鉱山と鹿角	1鹿角展 2気候と生物 3十和田湖と鹿角のおいたち 4生活と文化

1次案は、各部門から出された項目をまとめてグループを作り、自然環境を起点として、鹿角の特色を探究するという構成になっている。

2次案は1次案に導入部および生活に関する要素を加え、さらに美術を独立させて構成している。この案の大きい特長は、「集落と生活・文化」という大項目を設けたことで、その内容としては、1）集落と産業、2）鹿角の生活：衣食住、3）鹿角の伝承と大日堂、4）鹿角マタギ、5）鹿角の文化を支えた人びと、となっており、鹿角マタギ以外はすべて新たに加えた項目である。

この案に対して、「文化を支えた人びと」としてだれを出すのか、何人かを取りあげたとしても展示資料は特定の人物に偏る可能性があり、人物を取り上げて展示することは、日程的にも無理ではないかという意見や、全体としてのまとまりがなく、項目が多すぎるなどの意見があった。

3次案は、これらの意見を取り入れて大項目の数を減らし、全体を組織的にまとめて一貫性を持たせることをねらいとした。この3次案にもとづいて内容を整理し、まとめたのが1977年3月の第4次案である。その内容は展示計画作成資料抜粋の中に示しているが、1）導入　2）自然環境　3）おいたち　4）くらしと文化、という構成になっている。

この4次案で展示準備を進めることが確認されると、それぞれ担当ごとに基本シナリオを作成し、レイアウトの作業を始めた。ところがこの段階になって2つの難問が出てきた。その1は、美術・工芸の展示が部門の展示計画と、展示資料の性格から全期間にわたり、鹿角展に参加ができないということだった。そのために「生活と文化」という構成は分解せざるを得なくなった。第2の問題は「気候と生物」の展示で、資料の性格上、固定ケース内に展示することができないということだった。

「気候と生物」を展示全体の導入部とする発想には、鹿角の生物界全領域にわたって取り扱うことを期待し、提案したが、能力的に無理ということで、植相と蝶蛾相だけとなり、そのうえ固定ケースの外にはみ出す展示では、導入部としては扱えないということになり、これまでの計画を大巾に変更することにした。

そこで展示計画4次案の「十和田火山と鹿角のおいたち」を中心に、時の流れを軸とする展開を考えた。この時の流れにそってという展示方法は、すでに第一展示で取り上げている形式であり、できれば避けたいと思っていたのだが、この時点ではやむを得ず、この方法でまとめることにした。

このような事情から、バラバラになった計画をたて直して一貫性を持たせるために、シナリオ作成上の留意事項を配布し、これにもとづいて基本シナリオおよびレイアウトの作業を進めることとした。次に留意事項として配布した資料の中から展示のストーリーを紹介する。

展示全体の流れを、自然地形、特に十和田湖の火山灰によって形成されたシラス台地に焦点を合せて、1）鹿角盆地の形成→2）十和田湖の噴火と火山灰におおわれた高原の出現→3）この高原を舞台に、縄文時代をピークとする原始・古代の文化が展開される→4）河川に浸食された高原は段丘となり、段丘の先端に館がつくられ、館を中心に集落が形成され、稲作文化が浸透する→5）館はやがて中世の城となり、新しい支配者とともに関東の文化（修験と密教）が移入される→6）近世では、シラス台地が鹿角の生産を特徴づける畑作の舞台となる。というように、鹿角の特色を十和田湖の噴火でもたらされた火山灰（シラス）を背景として展開することを呼びかけている。

このように構成すると、鹿角の紹介は、アワ・ヒエの時代で終りになる。現在の鹿角を語り、その未来を考えるためにさらに「産業と交通」に関する展示を加えることとした。

以上の構想にもとづいて、1977年5月中旬には基本シナリオおよびレイアウト1次案を作成し、続いて5月30日には、鹿角市十和田公民館において、鹿角展の協力員および教育委員会関係者を交えて、基本シナリオの説明会を開いている。この説明会では、1）鹿角にふさわしいキャッチフレーズとして「伝説のさと鹿角」を生かしてほしい。2）中世の文化とその流入経路を強化してほしい。3）現在の鹿角を取り上げるにあたり、町や市当局の意向を参考にしてほしい。などの意見があった。

これらの意見を参考にして、テーマを、地域展「伝説のさと鹿角」と決め、内容についても伝説に関する要素を補充してテーマにふさわしいように改良し、「産業と未来」のコーナーについては、市や町当局の意見を取り入れて「豊かな自然とふるさと」というタイトルに改め、その内容を1）鉱産資源と地熱資源、2）農産・水産資源、3）民俗行事と観光資源、　4）東北縦貫道と鹿角の交通という要素で写真構成を考えることとした。

このような経過を経て1977年10月には実施シナリオおよびレイアウト実施案がまとめられた。

6　協力員制度について

昭和51年度の調査研究活動を企画するにあたって、新たに考えたのが協力員制度である。50年度は基礎的調査ということで、学芸職員各自の個人プレーとして調査活動を進めていたが、51年度からは組織的に準備を進めたいということで、これまでの活動を組織化することを考えた。それには1)それまで各自が現地調査にはいる際に、それぞれ個人的に知人や関係機関と連絡をとって進めていたのを、公的に組織的に活動ができるようにすること、2）当館の運営は県民総参加で進めるべきであり、地域展は県民が博物館活動に参加できる絶好の機会であることから、地域の方がたが参加できる体制を整える必要があること、3）また鹿角は博物館から遠く、限られた日程と予算で、地元の方がたに理解していただけるような展示を行なうには、地元研究家の積極的な協力なしには、ほとんど不可能であることなど、この時点では、是非とも必要な制度として考えられた。

この制度を設けるにあたり、鹿角および小坂町を訪れ、以上の趣旨を説明し、鹿角市および小坂町からは、協力員を委嘱してもらうとともに、協力員は、博物館が進めている鹿角展の基礎的な調査研究および展示資料の収集に協力していただくこととし、その任期は昭和51年8月から52年12月末日までとした。

準備経過は、昭和51年4月に原案をつくり、6月までに市・町当局と打ち合せを行ない、7月には協力員の人選を終り、8月に第1回目の協議会を地元で開いている。第1回目の協議内容は、鹿角展の構想と準備日程、調査研究活動計画と協力員の役割などとなっている。第2回目は昭和52年5月で、展示計画についての協議をしている。その他は各学芸職員と協力員との連絡提携のもとに調査収集活動を続けてきた。鹿角展協力員としてお願いした方がたの氏名は次の通りである。

鹿角市の協力員（　）はおもに担当していただいた部門

阿部雄次（民俗）　三谷敬一（民俗）　柳沢兌衛（美術工芸）　関　順一（歴・美・工）　関　久（美・工・歴）
安村二郎（歴史）　斉藤長八（美・工・民）　栗山文一郎（美・工）　米田　博（生物）　鈴木勝見（鉱山）
相馬茂夫（鉱山）　児玉隆吉（地質）　佐藤正二（生物）

小坂町の協力員

一戸秀雄（歴史）　小笠原修三（美・工）　安保　彰（考古）　栗山小八郎（歴史）　高田準平（民俗）

（加藤万太郎）

Ⅱ　研究の成果と展示

1　鹿角盆地と十和田湖

準備の経過

鹿角を紹介する展示を計画するにあたり、地質部門としては、「鹿角盆地の形成過程」をテーマとして調査を始めた。鹿角は黒鉱鉱床など鉱産資源にめぐまれ古くから鉱山の多い地域として知られている。そのために地質調査も良く行なわれており、文献資料も多い。

このような事情から地質部門では、文献を調査して展示計画を作り、この計画にもとづいて野外調査を行ない、展示資料を収集するという方法で準備を始めた。しかし実際には、文献だけで展示を計画することは難かしく、予察として回った現地調査の成果と文献による調査の結果を合せたかたちで展示計画案をまとめた。

準備の経過をまとめると、昭和50年度は、文献調査と現地予察の成果にもとづいて展示計画の粗案を作成し、51年度は、基盤岩類、第三系、第四系と段丘の調査など、展示の実施計画を作るための基礎的な外野調査を進めながら標本採集を行った。52年度は実施計画をまとめ、この計画にもとづいて不足な資料の採集、借用、クリーニング等の具体的な準備作用を行なっている。

研究の成果と展示

① 鹿角盆地ができるまで

県内の地質を扱う場合、一般に、基盤岩類、新第三系、第四系と区分するのが普通で、ここでもこの分類に従って展示を構成している。

イ、基盤岩類（大陸時代の岩石）

鹿角盆地の東方山地には、新第三系の基盤をなす古い岩石が各地に現われている。岩石の種類は、千枚岩に近い粘板岩が主体で、その他はチャート、砂岩、結晶片岩、輝緑岩、石灰岩などが知られている。藤本治義（1961）および土田良一ほか（1961）によれば、この地区に見られる石灰岩の形成年代は、古生代二畳紀である。

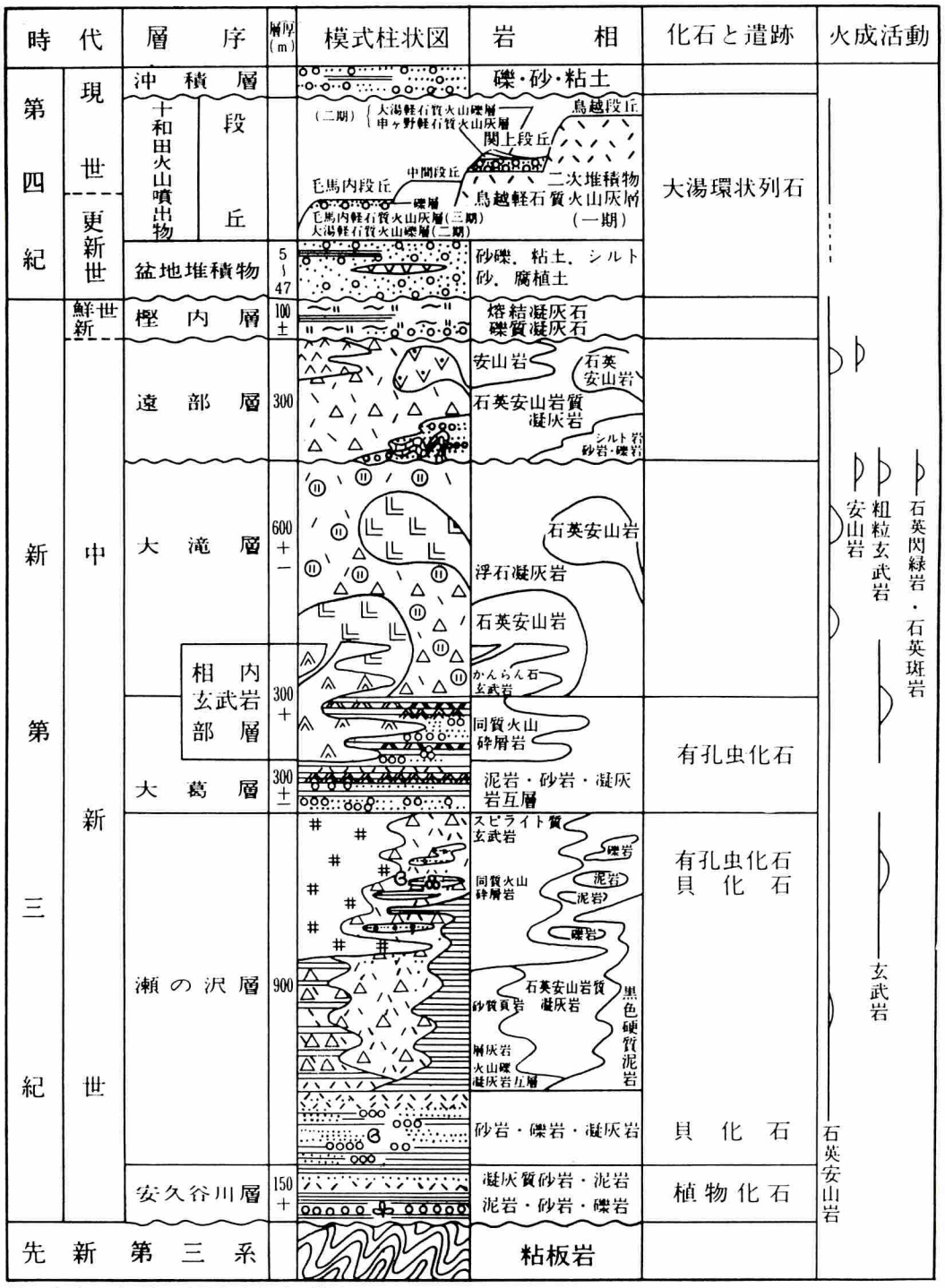
新第三系がたい積する前の日本列島は、アジア大陸に連なる大陸の一部であったことがわかっているが、鹿角に見られる基盤岩類の産出状態からも、当時は陸域で、深い谷のある、でこぼこの地形であったことが知られている。そこで、展示は、基盤岩類（大陸時代の岩石）として、上記の代表的な岩石の標本を中心に構成した。

ロ、新第三系（海底時代の岩石・化石）

秋田県総合地質図幅（1973）によると、鹿角の新第三系は古いものから順に、安久谷川層、瀬の沢層、大葛層、大滝層、遠部層、樫内層に分けられている。

安久谷川層は寒冷な気候を示す阿仁合型植物化石を産することから門前階に対比され、瀬の沢層は台島型の植物化石や台島一西黒沢を示す貝化石を産することから西黒沢階に、大葛層も含まれる有孔虫化石から西黒沢階土部に対比されている。大滝層は石英安山岩や浮石質凝灰岩など火山噴出物で構成されており化石は認められないが、大葛層から漸移することから女川階に対比されている。遠部層は、これより下位のすべての層を不整合におおう地層で、鹿角地方からは化石が知られていないが、大館、比内地区で同一層準から採集された有孔虫化石から船川階後期に対比されている。樫内層は、溶結凝灰岩を主体とする火山噴出物で化石は認められないが、玉川上

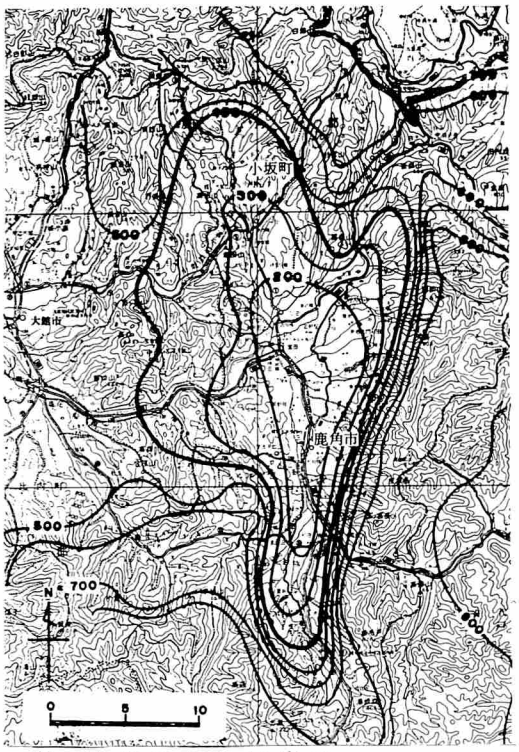
第1表 地 質 層 序 表



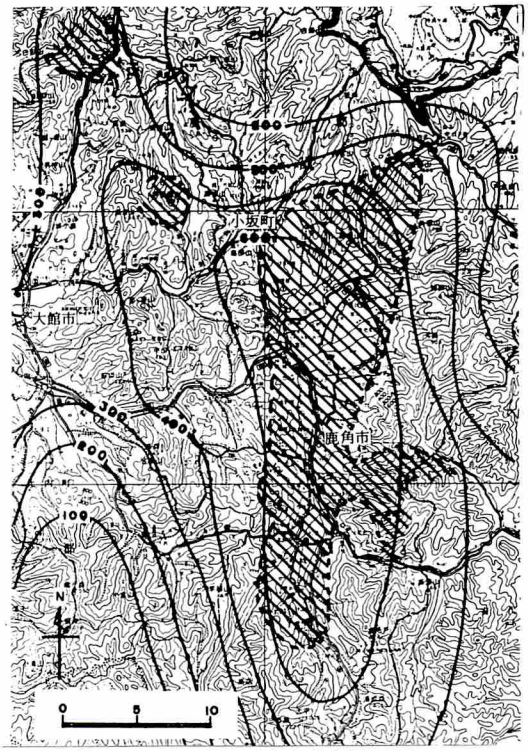
秋田県（1973）秋田県総合地質図「花輪」P 4による。

流域で、鮮新世の植物化石を含む田沢層と指交関係をなすことこら、笹岡階の地層とされている。

これらの地層の形成過程をたどると、安久谷川層形成期（3,000万—2,500万年前）には、気候は寒冷で植物化石や石炭がたい積するような内陸性の湖になっていたと見られる。やがて瀬の沢層から大葛層が形成する時期（2,500万～1,500万年前）には、火山活動をともないながら陸はしだいに沈降して海域が広がり、そこには暖流が流れ、海岸には温暖な気候を示す植物が繁茂していた。渡辺武男（1973）によれば、大葛層が形成された西黒沢階末期から、次の大滝層が形成される女川階初期（1,600万～1,300万年前）にかけて、この地域の海底では、酸性マグマの活動が活発になり、石英安山岩類が海底に噴出し、この海底火山にともなって湧出した鉱液が沈殿して黒鉱鉱床を形成したと言っている。また、池辺穣（1962）によると、船川階の中期（およそ1,000万年前）には、激しい構造運動が起り、奥羽山脈がしだいに陸化した。この際に、入江状に残った海域にたい積した地層が遠部層であるとしている。



第1図　鹿角盆地切峯面
（複雑な地形を単純な形に直した面の等高線）



第2図　遠部層の分布と等層厚線図
（単位はm、海底のくぼみを示す）

第1図は鹿角盆地の現在の地形を単純化した面（切峯面）を等高線で示したものである。第2図は遠部層の分布範囲と、同じ地層の等層厚線図を重ねて示したものである。これらの図を比べてみると、両者は良く似ている。切峯面は鹿角盆地のくぼみを示しており、等層厚線図は遠部層がたい積した当時の海底のくぼみを示しているから、これらの図が似ていることは、現在見られる盆地状の地形は、遠部層形成期の海底のくぼみ（海盆）として形成されていたことを意味している。言いかえれば、鹿角盆地を作る地殻運動は、この頃すでに始まっていたことを示している。

遠部層形成以後、鹿角地区は奥羽山脈の一角として隆起運動を続け、樫内層が形成された頃（数百万年前）には完全に陸域となり、一部には植物化石や泥炭層を形成する沼沢地があったことが知られている。

展示は以上の成果にもとづいて、遠部層形成期にスポットをあてて鹿角盆地の形成過程を説明し、最後に十和田湖の大噴火によって現在の地形ができあがるまでを、代表的な岩石や化石の標本を中心に構成している。この構成の中で初期の安久谷川層および最後の樫内層形成期は海域ではないが、新第三系の展示の構成としては、鹿角の海底時代としてまとめた。

② 十和田湖と鹿角の段丘地形

第2表 十和田湖と鹿角の地形発達史

十和田湖の形成史（久野）		鹿角盆地の地形発達史		
		（できごと）	（火山噴出物）	（^{14}C 年代）
第3期の活動	• 御倉山安山岩噴出	• 新しい沖積平野の形成 • 毛馬面（河庄から10～15m）の形成 • シラス洪水発生 • 浸食が進みシラス台地の段丘地形あらわれる。	毛馬内軽石層 発荷峠の軽石 大湯軽石層 （十和田a） （十和田b）	↙1450±100ｙ.B.P.八甲田湿原研究グループ（1969） ←1720±100ｙ B.P.加藤万太郎（1977） ↖1280± 90ｙ.B.P.平山次郎（1966） ↖2140± 90ｙ.B.P.松井ほか（1960）
第2期の活動	• 中ノ湖の陥没 • 降下軽石たい積 • 安山岩質玄武岩噴出	• 大湯環状列石作られる • 遺跡面＝関上面の出現、大湯をかなめとする広大な扇状地ができる。ここに縄文文化が栄えた。	申ヶ野軽石質火山灰層≒（中掫浮石） （南部浮石層）	←3680±130ｙ.B.P.渡辺（1969） ↙ 2930± 90ｙ・B.P.八甲田湿原研（1969） 3920±140ｙ.B.P.松井ほか（1969） ↖ 4200±110ｙ.B.P.八甲田湿原研（1969） 6550±170ｙ.B.P.松井ほか（1969） ←8600±250ｙ.B.P.大池昭二（1970）
第1期の活動	• 十和田湖の陥没 • 軽石流発生 • 安山岩質玄武岩噴出	• 十和田面（軽石流斜面）の出現 • 鹿角の低地が再び湖となる。 • 陸化し木が生える • 鹿角盆地が湖となる	（二ノ倉火山灰） 上部小坂軽石流 中部小坂軽石流 北秋火山灰＝鳥越軽石流 （八戸軽石層） 合川軽石流＝高市軽石流 下部小坂軽石流	←10410±250ｙ.B.P.佐藤博之（1960） ←12000±270ｙ.B.P.〃（〃） ←12200±250ｙ.B.P.平山次郎（1965） ←12700±270ｙ.B.P.大池昭二（1964） ←25700±900ｙ.B.P.平山次郎（1965） ←33000± ｙ.B.P.佐藤博之（1960）
先八甲田軽石流の発生		• 中位段丘の形成 • 高位段丘の形成	長土路凝灰岩 田代平溶結凝灰岩	

上の表は、久野久（1953）、藤岡一男・佐藤久（1953）、藤原健蔵（1960）、平山次郎・角清愛（1963）、内藤博夫（1966、1970）、平山次郎（1965）、佐藤博之（1966）、白井哲之（1966）、大池昭二（1972、1974）を参考に、筆者の研究成果を加えてまとめたものである。

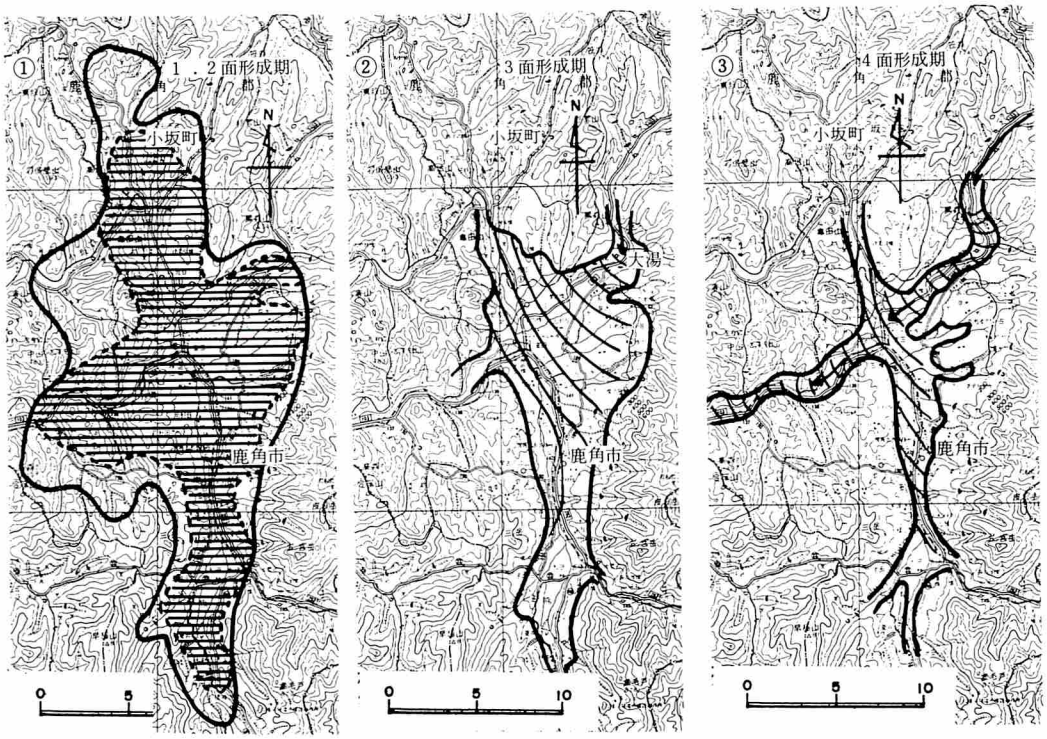
次に5万分1の地形図を用いて切峯面を作ってみると、盆地内に5段平坦面のが確認される。即ち第1面は標高250～300m範囲に見られる平坦面、第2面は200～250m、第3面は140～180m、第4面は110～130m、第5面は110m以下の平担面である。

第1面、第2面は藤原健蔵（1960）内藤博夫（1970）で高位面および中位面とした段丘面に対応するもので、軽石流発生以前に形成された段丘面が軽石流におおわれた当時の地形が残っている範囲とみられる。

第3面は、内藤の鳥越面および関上面に対応する面で、大湯を扇のかなめとする扇状地形が良く残っている。

第４面は、藤原が毛馬内面とした段丘面に対応し、900年前のシラス洪水のたい積面である。 第５は現在の河床に近い沖積面にあたる。

展示は以上の成果にもとづいて、十和田湖の形成過程と、それに対応する盆地内の変化、それぞれの現象に関係する資料として、火山岩、軽石、火山灰層、木炭などの標本を展示している。



第３図　十和田湖と鹿角の段丘形成過程

③十和田湖の噴火と伝説

シラス洪水と八郎太郎の伝説については、平山次郎・市川賢一（1966）および大池昭二（1974）によって研究されている。その概要を述べると、米代川流域にはシラス洪水とよばれる大洪水が発生し、その際にたい積したシラスと呼ばれる軽石層が全流域に分布している。ところで、このシラス層から埋没家屋があらわれ、これまでに数ヶ所から出た記録がある。これらの出土品やシラスに押し倒された木を使ってシラス洪水の発生年代を調べてみると、およそ1,000年前に発生した洪水で、大湯川および米代川をくだって日本海に注いでいる。

一方十和田湖には有名な八郎太郎の伝説があり、十和田湖の主であった大蛇八郎太郎が南祖坊に追われて、米代川を下って八郎潟へ逃げて行くという物語になっている。その格闘の場面は「万雷一時に落ちたかと思うようなうなり声をあげ、雲を呼び、天地をゆるがし、湖面波立たせ……２頭の竜はたがいに火を吹きかけ、山は崩れ谷は埋め、ついに湖はあふれて古木を押し流す、また十和田湖を追われた八郎太郎は鹿角盆地をせき止めて住みかを作ろうとする。住みつかれては大変と神がみが石を投げつけたので、八郎太郎は下流にくだり、鷹巣盆地をせき止めて浅い湖を作って住みついた、これを見た神がみが相談し、七座の峡谷を切り開いて日本海岸の八郎潟へと送り出したというのである。

この伝説は、まさしく、十和田湖の噴火の様子、大湯川に降り注いだ軽石流、やがてシラス洪水となって流れる情景をそのまま物語にしていると見ることができないだろうか、というのである。

これらの研究では、シラス洪水の発生時期を平安初期（1,000年前）とされているが、今回の遺跡発掘調査により、平安時代末か鎌倉初期と考えるのが妥当であるという結論を得たので、展示では約900年前として扱っている。

（加藤万太郎）

発掘された鹿角

鹿角市・小坂町にある原始から古代にかけての遺跡の多くは、標高150m前後の段丘上に立地している。この鹿角地域内の遺跡については、昭和38年に出された「秋田県遺跡地名表」によると確認されたのは56ヵ所だけであったが、現在では150ヵ所以上確認されており、最近の東北縦貫自動車道、鹿角北東地区農地国営開発事業等に関した調査により確実に数はふえている。さらに鹿角地域においての発掘調査は、昭和26、27年には鹿角市大湯環状列石が文化財保護委員会によって、昭和30年には鹿角市小枝指館が東京大学東洋文化研究所によって、昭和44年には小坂町杉沢の環状列石が小坂町教育委員会によって、昭和45年には鹿角市黒森山麓遺跡が十和田町教育委員会によって行われており、遺跡の分布調査は、昭和45年と昭和52年に東北縦貫自動車道関係の調査が、昭和48、49年には鹿角市花輪から小坂町までの大規模農道関係の調査が、昭和48、49、50、51年には大湯環状列石周辺の調査が行われている。

1. 研究目的と経過

鹿角の地域研究を進める上で大きなテーマとなったことは、十和田火山活動と南部要素であった。発掘調査で検出された遺構の多くは、下位火山灰層を掘り込んで構築されており、その上に遺物を包含する黒色土層が覆い、さらにその上に上位の火山灰層、大湯軽石層が覆っているという層位関係が指適されており、十和田火山活動との関係ではもっとも新しい十和田噴火と遺跡との関連がテーマとしてとらえられた。遺跡・遺物の所在やすでに行われた調査成果から考えられた調査課題は、鹿角市大湯・小坂町杉沢の環状列石について、小坂町発見の弥生式土器について、鹿角市十和田枯草坂・尾去沢三光塚等の古墳遺跡についてであった。これらの調査課題にもとづいた基本的な調査として遺跡・遺物の確認調査を行うことにした。遺物の所在調査については、博物館以前に実施した学校等の公共機関にあてた所在アンケート調査を参照したり、遺跡台帳に載った所蔵者をあたったりし、すでに開館前に調査カードのできあがっていたものもあったが、その他のものをカード化するのに時間をさいた。また遺跡確認調査については、鹿角市花輪平元、鹿角市尾去沢、鹿角市十和田末広、鹿角市大湯、鹿角市十和田毛馬内、小坂町小坂鉱山周辺等の各地区の踏査を行った。しかし、秋田県立博物館における調査研究の方法がとどく範囲では、踏査を進めることで地域研究の研究目的にそった発掘調査ができるまでいたらないのが現状であった。地域研究のはじまった昭和50年以降の鹿角地域の発掘調査としては、昭和51年にいたり、鹿角市教育委員会が主体となった大湯環状列石周辺遺跡分布調査が行われている。20,000m²の台地に50m×50mのグリッドを組み2m×2mの1角を坪掘りする調査方法がとられた。この調査では野中堂の環状列石から北300mの地点に直径60mと推測される環状列石のあることが確認されており、配石や組石の下には土壙をともない、組石のつくり方や土壙の埋り方の順序が推測できる資料が出てきており、なお配石・組石は大湯軽石層の直下にあったと報告している。昭和52年度には、秋田県教育委員会が主体となり、大規模農道関連遺跡の調査として鹿角市平元鳥野、源田平遺跡の発掘調査が行われた。古代の集落遺跡は昭和27年に菩提野竪穴群の調査例があるだけであり、鳥野遺跡では奈良時代後半に位置づけられる竪穴住居跡1軒、源田平遺跡では平安時代後半に位置づけられる竪穴住居跡2軒が検出され、いずれも大湯軽石層が住居跡を覆っていた。こういったことから大湯軽石層と遺跡の関係は、縄文時代後期から平安時代後半までの遺構を覆うということが確認された。大湯軽石層の噴出時期を考察したものとして平山次郎・市川賢一の「1,000年前のシラス洪水※」があり「十和田火山最後の活動で噴出した大湯軽石とそれに引き続く新期軽石流が下流部で水を含んでシラス洪水に転化したものと考えられる。」とし、噴出年代についても同時期の1,000年前と考えていながら、「もっと新しくなる可能性もある。」としている。平安時代後半の竪穴住居跡を覆っていることから、大湯軽石層の年代については、平安時代末に火山噴火があり、噴出物が堆積したと現段階では推察できる。　※地質ニュース№140 昭和41年4月

2. 展示構成について

以上のような調査活動により最終的な展示は、鹿角地域の環状列石について、鹿角市・小坂町出土の縄文時代早期から平安時代までの土器・石器の出土品紹介、平安時代後半の竪穴住居跡を覆う大湯軽石層について、以上三テーマで構成した。環状列石では昭和51年度に検出された組石の復元写真と大湯・杉沢の環状列石出土品、鹿角市玉内の縄文時代晩期の組石とその出土品の展示した。全体の展示資料は50点余りである。

（庄内　昭男）

館　と　集　落

研究の経過

ア目的　鹿角地方の研究ということで、展示と関連させながらどう取組むかを考えた結果、館を文献史学の面から見ることにした。県内にはかなりの城館が分布しているが、立地条件をみると山地が切れて平地になるあたりに築かれており、しかも戦国期、村落を支配する地侍の居館として利用されたものが殆んどである。館の構造や機能等については諸説があり、まだ定着していないが、中世になってつくられたいわゆる城と、古代以来の施設を中世後期になって改良し、利用したものに分けられるような感がする。それはともかく、この研究のねらいは、館から何が出てきたかでなく、館の分布、館主、及びそれと村落支配等社会史的な面に重点がおかれている。

イ経過　館のでてくる史・資料＝遠野南部文書、鹿角郡由来記、文政４年南部盛岡藩領絵図＝から先ず館名をひろい、それにもとづいて現地を踏査した。南北朝時代の楯（館）は文献上では５ヵ所あるが、確認できるのは大里楯のみである。これに対し戦国・織豊期に関する鹿角郡由来記は、これに基づく地元の研究もなされており、しかも古い村落に必ずと言ってよい程館が存在するので調査は良好に進んだ。しかし時間的制約もあり、郭や溝の大きさ、全体の規模など十分にはなしえなかった。

1.　研究の成果

所在に関しては地元の人もよく知っており、50ヵ所前後確認できた点は成果があった。しかし館の上は現在殆んど畠になっており、かつて表面採集によって得られたものも全く残っていない。昭和30年(1955)、江上波夫・関野雄氏等によって発掘された小枝指館出土品の所在がわかり、借用できた点は幸いであった。なお以下に列記する内容は研究成果というよりは資料紹介である。

ア館は山地が切れて平地になるところに立地しており、この点は他と変わらない。従って鹿角盆地を取り囲むかたちで分布している。

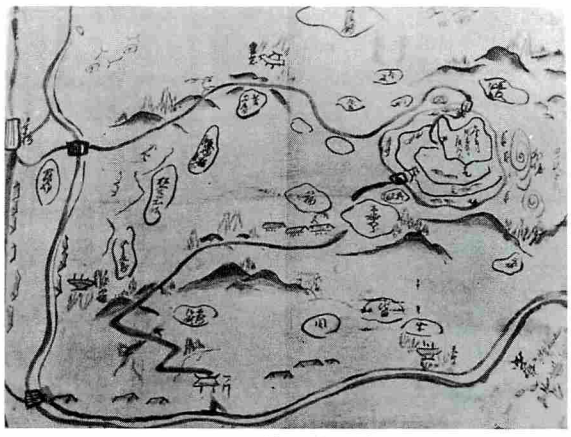
イ村の分布と館の分布が一致している。即ち村のあるところに館があり、村のないところに館はない。換言すれば水田から離れた所に館はない。

ウ館の規模は小さく、館の間隔も狭まい。全県的に見ると狭まい割りに密集している感がある。

エ館主は村の支配者であり、村を支配するために館がある。従って館は軍事的性格よりは行政的性格が強い。

オ館主は原則として一村を支配する規模のものであまり大きくない。館の規模が小さいのもそれによる。

カ館主の動きは郡としてまとまっていない。南部氏の支配下にあっても安東氏の侵入に対して、それに味方するもの敵対するものがあり、向背定まっていない。



元　西　城　絵　図

キ鎌倉時代の地頭の系譜をいく成田氏は、比内の浅利氏に匹敵するまでに成長できなかった。せまい地域に村単位の地侍が乱立する状況になり、それが小規模な館の分布となって現われた。

ク館からの出土品は、発掘調査報告「館址」によると、縄文時代から安土・桃山期にまで及んでいる。

2.　展示のねらいと構成

盆地中央から東側を眺め、小枝指・小平・高市・柴内と狭まい間隔で台地上に並ぶ館の景観、従来あまり関心のなかった館神―鹿角の場合殆んど八幡であるが―と、館がなくなってからも集落の鎮守として庶民に保護されてきた事実、小枝指館の発掘現場と出土品、鹿角の館と戦国期の城を比較する意味での雄勝郡の元西城絵図（小野寺氏一族の居城）、これらを写真と実物で展示し、関心をもってもらうことにねらいをおいた。

館の研究はまだ十分やられていない。発掘するにしても大規模な発掘は期待できない。何か出てきたかも重要であるが、村落の中で先ず館主は何であったのか、そこから館の性格も規定されるように思う。今回の調査では勿論不十分であったが足がかりになれば幸いである。

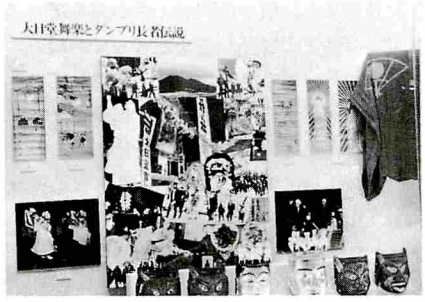
（塩谷順耳）

信 仰 と 伝 承

1. 八郎伝説 Ⅰ①「鹿角の南部要素」を研究目的とし、筆者は特に八郎伝説についてそれを追求することとした。②初年度は文献の渉猟にあてた。次年度は専ら黒沢家旧蔵本『十曲潟山本地記録』（天保14年湯沢源之助写）の翻刻にあてながら、各遺称地の調査とその他民俗事象の調査を試みた。最初の整理段階をむかえる頃（展示作業の具体化の段階）、落ちたテーマを充足することとなり、そのため、八郎伝説のまとめは中断せざるを得なかった。Ⅱ展示の方針に従って、シラス洪水という、予想しにくいテーマの中に位置づけられ、一種のムード作りとして協力した。シラス洪水という荒れ狂うシラスの様子を八郎と南祖坊との闘争に見立てたもので、シラス洪水の文芸化が八郎伝説だというのが、ここでの方針である。是非は別として、発想としては成功したと思う。

2. 大日堂舞楽 当初のシナリオにはなかったもので、新たに加えられた小テーマの一つである。「大日堂舞楽」が重要無形民俗文化財に指定されたということと、その概略を知ってもらうために展示した。しかし、大日堂舞楽自体の広がりから考えて、到底、全貌に触れることは考えられず、結局成し得たことは、二年前の勝平展の調査で得られた写真をコラージュ化し、バックパネルとした程度であった。舞についても一部落から一舞は必ずパネルとして展示することにしたが、スペースの関係でできなかった。唯一の実資料は、谷内部落の協力による五大尊舞の神面と大博士衣裳一式、それに、大里部落の神役であった「一の庭」関係の文書写しだけである。そのほか、多数の文書を発掘できたことは、意外な成果であったが、解読整理は手つかずの状態である。

3. だんぶり長者伝説 2・5の小テーマ同様、新しく加わったテーマで、いずれも充分な調査ができなかった。「伝説のさと　鹿角」のタイトルにそって、各コーナーを伝説でうめる方式も調査の立ち遅れから、一貫性がないものとなったようだ。このテーマを生かすためには、大日堂舞楽とのつながりをいう以外見当らず、またそうすることによってのみ狭いスペースを切り抜けられると判断した。伝説自体については従来の説を一歩も出ることなく、地元の識見をそのまま踏襲せざるを得なかった。ダンブリ長者伝説の後半部分、五の宮皇子譚の概略は掛軸による絵説き形態となっていたと伝えられる。しかし、絵柄によっては聖徳太子孝養図や富士山駒登りのほか、阿弥阿来迎図、雄・雌神曼陀羅等の系譜を引く、雑多な集積とみられるとの意見もあり、そうした新しい判断を取り入れるべきであったが、成し得なかった。



ここでのねらいは、大日堂舞楽とだんぶり長者伝説との結合にあった。展示室の写真を見てもわかる通り、実物は少ない。中央には、主として舞楽開始前の諸準備の様子を20枚程度の写真で組み、その組み写真の中央には大日霊貴神社内部・その上には五の宮岳の遠望写真を配し、小豆沢部落を主にとりあげた。組み写真上方左右にはそれぞれ、伝・五の宮皇子譚掛軸を、下方左右には大里・長峰両部落の能衆の一部を配した。前面傾斜台には谷内部落の「五大尊舞面」（八幡・普賢・胎・金大日・文殊・不動一密教の五大明王説乃至『大妙金剛経』の八大菩薩が八大金明王を現ずるとする説等あるとされる）、さらにその前面には古文書（大里一の庭「面付帳」宝永5・2丁横、同「下書扣」5丁縦）を配した。多くのテーマを担当する羽目になったとはいえ、それにしても不本位な点が多すぎたと痛感する。

4. 信　　仰

Ⅰ①　旧南部領に属する鹿角地域は、文化の流入伝播からみても太平洋側の影響下にあったものと推された。つまり、ここでも南部要素の解明という点にそって調査された。

②中世、鹿角に所領を与えられた、いわゆる鹿角四氏が支配していたころの信仰遺物としては花輪恩徳寺の弥陀三尊の立像（県文）があるくらいのものである。関東武士の移住ということから想起されることは、原住地で盛行していた板碑をはじめとする石造遺物である。これらの遺物の分布をとなりの岩手・青森両県に比べてみるとき、鹿角郡は全く調査されていないことが一目して瞭然である。

今回、地元研究者の協力を得て、この面の解明に当ったが、鹿角全域にわたることはできず、主として八幡平地区にとどまった。しかし、幸い谷内神明社小豆沢大日堂において磨崖碑(1)・有紀年銘板碑(5)その他を確認できた。（詳細は、「鹿角郡における中世石造遺物について」参照）

Ⅱ　「館と集落」に続く、このコーナーでは中世の信仰と伝承の一端を膚で感じとれるよう実物資料の展示につとめた。しかし、資料の性格上、確認できた全ての実物を搬入することができなかった。

まず、壁面に磨崖仏の写真パネルを配し、荘厳さをあらわそうとした。前面には五輪塔の残欠と関東系と考えられる板碑を置き、所在地でのあり方を示そうとした。なお、板碑の銘文は肉眼的に判読容易でないので壁面に拓影写真を掲げ、判読の便に供した。

恩徳寺の弥陀三尊はコーナーの中心的存在と考え、ほぼ中央に配置した。大日堂板碑は重量の関係から、ケース内に入れることができず、フロアーに置くことによって、むしろ野外展示的な効果をねらった。

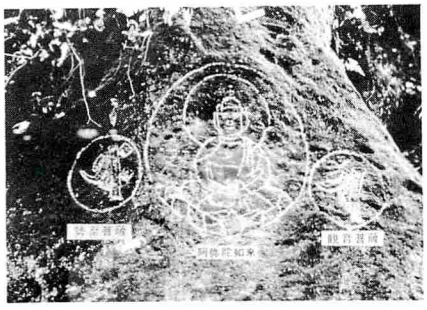
5. 畑作生産暦

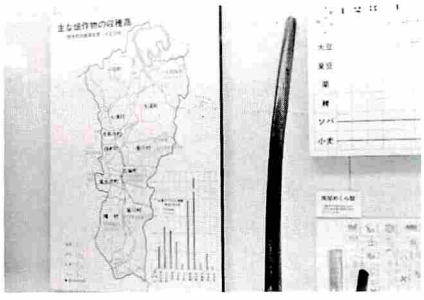
畑作に関する生産暦は、「村のくらし」の冒頭にあり、パネル化してある。

Ⅰ①　火山灰におおわれた鹿角地方での特色は、畑作にありという趣旨に則り、主な畑作物の生産額と生産暦を作成することにあった。②テーマが決まってからの一年間（実際の調査は５～６回）のほとんどは生産暦パネルのための調査にあてられた。広い地域全体をまとめるには時間的余裕もなく、そういいながら地域を絞るのに２回位費してしまったと思う。結局、草木地区のうち丸館を採用してパネルに納めたが、細部については今もって疑問を抱いている。一方、生産額分布図の方も他の郡市とくらべ、はっきりとした特徴も得られないものに終ってしまった。資料が『鹿角郡産業調査書』（大正12年）１本だけであったことと、担当である筆者の非力さによるものと考えられる。

Ⅱ「村のくらし」の導入部ということで、各コーナー共通の分布図パネルに粟・稗・大豆生産額をイラストで示すとともに、県内郡別の産額も棒グラフで表した。その右には、生産暦パネルを壁面にかけて、稲作の作業と畑作の作業の相関を表した。ケース内のステージに展示された踏鋤等の農具と合わせて畑作の手順を知る一助となればと思った。

（磯村朝次郎・嶋田忠一）





町のくらし

I　調査の概要―江戸時代後期・鹿角地域の商品流通覚書―

①調査の目的

第1に幕藩制的論理がいかに貫徹するの問題がある。第2にそれをふまえた上で、鹿角地域の特質を追求しようとするのが基本的な目的である。

すでに秋田県史第3巻の秋田諸藩の政治「南部藩」の項において、南部藩政の推移と鹿角地域の動向、とくに給人の知行形態や経済関係の分析が行われている。今回の調査は、鹿角地域の全体像をこの秋田県史に依拠しながら、江戸後半期の商品流通に焦点をあてて、若干分析した結果を報告するものである。

②毛馬内・山本家

山本九郎家の資料は、高瀬吉五郎氏ほか3名の調査によって200点が整理されている。しかし、この全資料の分析はまだ行われてはいない。ここに代表的資料を中心として山本家の経営を紹介したい。

第1表　毛馬内・山本家　元文6年（1741）勘定目録

№.	品　目	金　額	№.	品　目	金　額
	（商　業）		14	買　田	60〆394文
1	金銭・米代他品々	6,489〆362文	15	年 賦 米	133〆292文
2	無　尽	70〆664文	16	持屋敷斗代 米・粟 大　豆	14〆833文
3	拂　米	275〆634文	17	持地斗代　大　豆	58〆833文
4	貸付高　銭	261〆338文	18	〃　あ　わ	37〆028文
5	貸付　米	145〆570文	19	持地斗代　米	1,197〆536文
6	見世利銭（米）	241〆468文	20	知行畑斗代　大豆	431〆821文
7	山　銀	63〆877文	21	手作稈 大地・小坂・濁川	426〆709文
8	拂　粟	12〆734文	小計		2,055〆469文 (20.5%)
9	振　馬	2〆400文		（知行地）	
10	味　噌	42〆343文	22	物成米・餅米・大豆	72〆216文
11	ふき丸代	56〆543文	23	知行出高　粟	7〆500文
小計		7,661〆933文 (76.3%)	24	〃　稈	19〆268文
	（地　主）		25	〃　米	222〆141文
12	田形返し代	77〆文	小計		321〆125文 (3.2%)
13	長屋家賃	18〆220文	合計		10,038〆527文

第1表は元文6年（1741）2月山本九一郎の「勘定目録」から抽出して整理したもので、資料の記載順序を示すものでない。この収入やく1万貫文というのは、この時点の在町における取引額としては大きいものと考えられる。その中76.3%は商業経営から生じたものと判断される。とくに多額の項は№.1の「金銀米代他品々」で、全体の64.6%にあたる。この内容は、金銀のほか「1643貫609文　有物　米842駄2斗8升　但　4斗1升替　正米ニ而内蔵・町蔵・小坂蔵・大地蔵・濁川蔵・大湯喜八・○石三郎兵工其外所々預け米」をふくむ新・古・餅米1,443駄がある。その外に大豆100駄余、粟64駄余、稈・蠟・たばこ・鉄・塩（竹原）などがある。

また、地主的側面の収入は20.5%であるが、斗代（小作料）として米・大豆・粟などの収入や、長屋家賃の収入もある。同家の所持高はこの目録によれば、蔵入地では毛馬内・万谷・小坂（206石余）・大地・冠田村の387石余、給地は桜庭安房の毛馬内・瀬田・荒川村、江場又次郎の万谷村、北九兵工の大湯村ほか184石余で、合計572石余である。

さらに、知行地はこの時点では100石をもち、物成米その他の収入を得ており、全体の3.2%になっている。

また、同目録には拂の項があり、1014貫余文の上納分、小遣その他で拂項目合計2708貫余文である。

以上のように山本家の経営は、商取引を中心にして地域的には小坂方面を重点とし展開していると思う。

③毛馬内・町井家

利用する資料は、文政13年（1830）差引帳と天保10年（1839）大福帳で、共に毛馬内・奈良寿氏所蔵のものである。

第2表は、天保10年（1839）大福帳の取引人数を、地域毎に集計したものであるが、この分類方法は原資料である大福帳の表示に従ったものである。この地域をみると、毛馬内を筆頭に小坂・大湯方面の北部農村地域にわたっている。この小計が447人で63か村に分布している。参考のために寛政の戸数（「邦内郷村誌」南部叢書第5冊）をあげたが、必ずしも1戸で1人しか取引しないというわけではないので、およその傾向をはあくするためである。すなわち、毛馬内や瀬田村通は取引人数の密度が高いことになる。また、花輪や郡内・秋田領（十二所・扇田・大館）・青森・三戸など33人の取引関係者が存在する。

文政13年の商品は、米・粟・茶・たばこ・木綿・繰綿などであるが、数量上問題にしてよいのは茶以降であり、とくに金額の上でも大きい繰綿に注目したい。買入れは26本本数半でさほど多くはない。この中、太田新六より

8本ほか9人よりの買入れである。これをどのような過程で生産していたか、その全ぼうを知る資料はないが、つぎの資料は工程の一端を示してくれる。天保10年大福帳に「未5月15日　3貫991文右者取かへ銭ゆへ　綿打ちん引残りかし　綿打　庄助殿」「戌1月入7貫77文　右は綿打ちん共惣差引残り預　善助」のように、綿打専業者に賃金を支拂っている。これは、秋田県史「南部藩」項の取替木綿そして問屋制的経営の見解を裏付ける資料である。このようにして生産された商品は、第2表で示した地域に販売される。比較的大口は、文政13年に向ノ専右ヱ門に対し、木綿11反を3回にわたって8貫250文で販売している。また、小口の例としては、天保13年大福帳記載の「天保7年（1836）3月3日300文　風呂敷代かし　藤原　三右ヱ門、天保10年（1839）3月　735文　木綿代　かし長者久保　勝之亟、天保4年（1833）3月22日　80文　浅黄代残かし留池ノ吉十郎、天保8年（1837）12月13日　664文　股引つぎ代かし　鴇村　孫」とある。もちろん、この町井家の販売商品は衣料品だけでなく、食料品その他もある。

第2表　毛馬内・町井家取引人数　　天保10年（1839）

No.	分　　類	人数	村数	寛政戸数
1	毛馬内	189	5	314戸
2	万谷村・荒川村より小坂上ミ・八九郎村まで	56	12	326
3	上　向　通	29	10	175
4	川　向　通	30	11	543
5	腰廻村より大湯通	42	11	192
6	瀬田村通	28	1	50
7	石野村大欠村松山通	17	4	87
8	大　地　村	25	2	42
9	長土路　芦名沢	20	6	56
	（小　計）	436	62	1,785
10	花　　輪	11	1	484
	（小　計）	(447)	(63)	(2,269)
11	その他(1)　郡内	10		
12	〃　(2)　秋田領	9		
13	〃　(3)　青森・三戸	3		
	（合　計）	(469)		

また、逆に買入れた例をあげると、狐平石井音之亟家の嘉永元年（1848）万覚帳（花輪図書館所蔵）によれば、大和屋又八より、手拭・白6尺絞3尺7寸・浅き・木綿きれなど5貫265文買入れている。

④花輪・土館家

花輪・土館市蔵家所蔵資料は幕末・明治期に集中している。その中、文久3年（1863）差引帳と明治2年（1866）大福帳を手がかりとして、同家の経営状況を確認したい。

まず明治2年の販売商品は、諸味13石余（367貫余文）・しょう油（51貫余文）・そうめん（10貫文）・酒樽（13貫余文）・籾3駄余（108貫余文）などがあるが、主体は海産物のようである。第3表にあげたほか13種あり、合計27種におよぶ海産物を販売しているが、表以外は不明品目が多い。第3表の海産物の内容は、生にしんを筆頭に塩引・塩ますで593貫余文の大部分となる。1戸に対する販売数量の大きいところをみると、土館家は問屋的存在と考えられる。

第3表　花輪・土館家　主要販売海産物
明治2年（1869）

No.	品　名	数　量	金　額
1	生にしん	3,045本	235〆669文
2	塩　引	84本	193〆980文
3	塩ます	196本	163〆520文
4	さ　め	38〆200め	45〆760文
5	塩	7石5升	35〆900文
6	かつぶし	32本	24〆200文
7	身　欠	16は	19〆209文
8	まぐろ	4本	19〆文
9	くじら	950匁	9〆300文
10	いわし	450疋	8〆280文
11	数　子	2升3合	3〆586文
12	塩たら	30枚	8〆400文
13	た　ら	26枚	2〆文
14	魚　油	2升	2〆300文
小　計			771〆104文

前述の狐平・石井家の同資料によれば、同家は鏡田屋新五郎より、鯨・塩鱈・塩引・身欠・さば・塩ます・かつふし・いわしなど6貫余文を買入れている。これは、土館家＝問屋から鏡田屋家＝小売へ、そして農村部の石井家＝消費者への販売という図式が考えられる。

さて、土館家の海産物購入ルートであるが、文久3年差引帳によれば「8月10日378文　塩3駄　十二所役せん　2貫52文塩3駄　沢尻より花ワまで」の記載があり、十二所より先は不明であるが、この米代川ルートも利用している。しかし、かなりの数量が、青森―弘前―碇関―濁川―小坂・毛馬内―花輪のルートで

入ってきている。従来、当地域の商品流通ルートとして、米代川舟運を利用しての能代との取引きや、陸路利用の八戸・野辺地とのルートがあげられてきた（「秋田県史第３巻南部藩」・奈良寿氏「歴史の中の鹿角上巻」）。ここで従来の研究を否定するのではなく、海産物については青森ルートもあったことを付加しておきたい。

なお、この土館家の海産物取引きは、仕入れ一方で例えば青森に対する販売がない点、帳簿上の性格のゆえか明確ではない。もし、仕入れのみとすれば１つの特色ある流通形態をとっていると考えられる。

⑤若干の問題点

以上、３家を中心にして主として商品経済関係を概観した。極めて大胆にいうと、今までわれわれが秋田藩の商品経済、とくに在町のそれを分析して得た結論と基本的には同一であることを認めざるを得ない。山本家の元文期の商業・地主・給人の立場は、やや時代が遅れるが平鹿郡沼館村の佐々木儀右エ門家の展開（秋田県史第３巻）と類似している。また、町井家の木綿を中心とする生産・販売の例も、後期秋田藩在町の商業経営の中で多くみられることである。

そうであれば、それを支えた同一の農村基盤があるべきである。ここで問題となるのは江戸時代中期以降の農村において、一般的に米の商品化があげられるが、鹿角郡は不利な状況であったと考えられる。今、その時代の資料が見当らないので、明治期の資料で類推しよう。明治42年（1909）秋田県の郡別畑作地割合は（秋田県史第５巻）、鹿角郡は46.6%で第１位、ついで北秋田郡の35.8%である。また、明治９年（1876）粟生産量の秋田県全体に対する比率は、秋田郡が41.8%で第１位、ついで鹿角郡35.5%となっている。稗については県のほぼ半分の48.7%を鹿角郡がしめ、秋田郡の39.6%がそれにつぐ。また、明治20年（1887）作付面積の県全体に対する鹿角郡の比率は、粟の29.3%・稗の53.4%である。

従って、米生産の少ない鹿角郡が、他郡と同じ在町の商業経営を展開し、また富を支えた基盤は何であったのか、改めて問い直す必要がある。鉱山や労働関係の編成の仕方が考えられる要素であろう。

Ⅱ　展示のねらいと構成

以上の経済基盤を基本にして考えられるのは、この地域の象徴的存在として、新給人を展示の中核としてすえるのが適当であろう。これは一般的には金納郷士の概念に包括されるものであり、秋田藩でもいくつか確認されている。しかし、その質・量において他藩を上回るものであろう。正に、商品経済・土地・政治と三位一体の王者として、地域に君臨したものと考えられる。この新給人の存在に気づかせてくれたのは、秋田県史第３巻の南部藩の項であり、また、森嘉兵エ氏の「岩手県の歴史」であった。

また、展示構成は（イ）新給人のくらしの中で、とくに武士的側面を強調するために、床の間写真をバックにして、甲冑・火消装束などの資料を配置した。（ロ）商人・地主的側面を帳場的表現で代表させることにした。そのために、のれん・銭箱・帳簿などで構成した。（ハ）鹿角の商品流通をパネルで表現した。すなわち、土館家海産物買入れ略図および主なる販売海産物の品目・数量、また、町井家の取引地および木綿生産・販売の数的表現を試みた。（国安　寛）

錦木塚と細布

1. 調査研究の経過と概要

この小テーマを設定したのは、伝説という無形の民俗遺産が土地の歴史伝承の中でどのように位置づけられるか、またその中からどのような展示資料が得られるかを試みようとしたからである。

錦木塚伝説は「八郎太郎」「ダンブリ長者」とならぶ鹿角の三大伝説として親しまれ、記録や口碑にもよく残っており、毛馬内駅前の公園内に遺跡地としてもよく保存されているものである。

伝承記録として注目されるのは「錦木山観音寺縁起」であり、これが錦木塚伝説の出拠と判断されるが、残念ながら現存していない。幸い明治の郷土史家内藤十湾が「鹿角誌」に錦木塚別当黒沢圓次郎祖先より伝来「奥州狭郡錦木山観音寺縁起」として収録してあるのをみることができた。また、菅江真澄も「けふのせばぬの」の中で見聞と合せて偶然にも土地の古老が下張り紙に使用しようとした「錦木山観音寺由来記」を書き写しているが、内容はともに漢文体で大同小異のものである。

観音寺は、悲恋の主人公政子姫の死によって断絶した名門狭名(さな)大夫家の供養のために、配流となっていた五宮皇子が勅免により都に帰った折の献上品（細布と砂金）と報告によって、勅願寺として百済渡米の観音像を安置して大化元年（645）8月創建したものであるという。後の伝承として正平17年（1362）、毛馬内の豪族成田越前が観音寺住僧覚水と争乱してついに焼失したと伝えている。観音寺はこの時以後再建することなく、縁起文だけが別当黒沢家に伝えられたというものである。

錦木について

縁起伝説の内容から二つのことを考察した。ひとつは狭名大夫家8代大海の娘政子姫の悲恋にまつわる錦木塚由来の錦木である。これは草木の若者が政子姫を恋して、その門口に自ら市日で売る仲人木、錦木を三年三月通って千束を積んだが、かなえられずに病み死んだというものである。古来、文字のなかった鹿角に、愛する女への印にその家の戸口に錦木を立て、女はこれを取り入れて男をむかえたという伝承があったとするものであるが、これはすでに日本の原始古代にみられた妻問い婚の習俗と同類のものと考えられる。

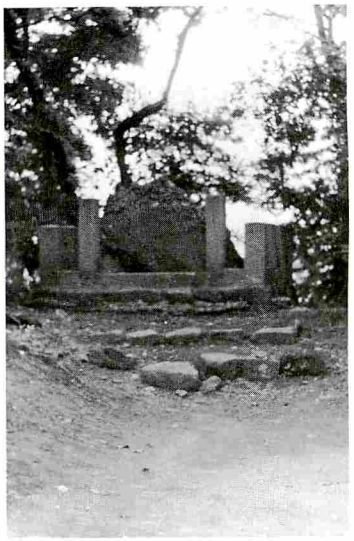
古代の大和人が歌文を妻問いにおくったというが、文字をもたない古代東北人の妻問いの原型を語るものであろう。かなわぬ時は、千束を通い積めばその恋はかなえられるとも語られているが、若者が千束を通い積んでもかなえられなかったという結末は、この仲人木の習俗の終焉を語るものであろうか。

錦木について菅江真澄は（曲田慶吉、錦木由来も）楓の木、酸の木、かば桜、まきの木、苦木の美しく紅葉する5種の枝木を3尺あまりに切って一束に結んだものと伝えているが、松浦武四郎は「鹿角日誌」に若木を切り、草木の花果で染めしるしたものと伝え、このあたりの小祠に蝦夷地アイヌのイナウと似たケズリカケをまつることの多いことと合せて古来の風が残っていると誌している。また植物学のうえでは、にしきぎは「衛矛(えいぼう)」で、山野に自生する6〜7尺の落葉灌木とされ、秋季果実成熟して裂開し、黄赤色の種子を露出する。秋の紅葉甚だ佳である。木材は小細工の材料に供し、樹皮を採りて製紙の原料とし、嫩葉(どんよう)は食用する外、庭園に栽植するという。（植物と伝説）今も鹿角の人びとは垣根や庭木としてこのにしきぎに親しんでいる風がある。妻問いの錦木は、5種の紅葉樹か、衛矛か、若木の染木か、いずれが、いつ頃まで伝承されたのであろうか。

一応の整理として、若葉を食し、樹皮をとり、赤い果実と美しく紅葉もするという効用の大きい「衛矛」が本命であったが、束ねて売り買いするようになって5種の紅葉樹の枝木に替えられるようになり、さらに仲人木としての実質、実効がうすれて若木の染木に変質したものであろう。

ただ、これらの錦木がいずれも秋の紅葉樹としての意味であり、その実効は秋季から冬にかけてでなければならない。そこでもうひとつの推論を試みたい。それは東北に残存したという「夜ばい」の習俗である。これも古代妻問い、通い婚の名残りという説があり、ここに面白い報告がある。やはり松浦武四郎の「東奥沿海日誌」に、『此辺にて、五月五日より八月十五夜迄八村の若きものども夜中彼方此方と歩行て能き娘もてる家に忍て泊る由。……夫故に一向に戸の〆（締）りもせず……扨如此幣の中、日月をいつと限りしも又おかし』として村の若者とさまざまの話をし、残念ながら行事のすぎた季節で来夏にでも来ようと笑い合ったと誌している。このことは、

江戸後期に津軽半島に残存した妻問い「夜ばい」が日月を限った春から夏の解放された習俗であったことである。戸締りする秋季からの妻問いの合図の印木として、思い定めた女の戸口や窓辺にこそ錦木がたてられ、それが内にとりいれられることが女の合意であったと考えられるのではなかろうか。



若者たちの愛の通いに一定の季節の日月だけが許され、あとの季節は禁欲を強いるということは、大らかな昔人の愛のロマンとしていかにも不自然であろう。

しかし、鹿角日誌にみえる、若木の染木も、祈願木のケズリカケも、もはや今の鹿角では探し求めることはできなかった。

また、錦木山観音寺の所在について郷土史家、奈良寿氏が最新刊「歴史の中の鹿角」中巻で、注目すべき推論を出されている。

古川村から運ばれたという「おったて石」が有無縁菩提塔の道標であることや、数基の墓石の発見と合せて、宝暦年間の南部史料（修験堂社の分布）によって古川村に錦木山観音堂のあったことをあげて、道標をいずれかの門前石としておられるが、供養道標であるからおそらく近世の建立であり門前塔にこだわりすぎるのではなかろうか、もしかかわったとしても観音堂であろう。また永久山円福寺の遺品、阿弥陀如来金銅仏についても「正安二年富永庄三郎」の鋳造刻印の真偽をたしかめていないが、建立由来にもあるように本尊仏は観音像がふさわしいのである。その意味でこの地方の観音信仰の歴史的背景と分布を、先学諸氏の協力を得て今後の調査課題にしたいと考えている。

細布について

狭布（せばぬの）、（狭布）細布（けふ）のことも錦木とともに平安歌人の幻のロマンとして歌われたが、すでに延喜式に陸奥（せばぬの）、出羽の調、庸として狭布のことが出ており、東鏡にも平泉の秀衡が献じたという記事もみえている。

その細布の巧者、創案者として政子姫を主人公として語られることでは、広く他にみられる織姫伝説でもある。

織姫は、昔話の鶴女房などにもみられるパターンがあって、鳥や天女の化身であったり、高貴な身分や蛇姻による薄命など悲運ものが多く、糸や布さらしの関係でもあろうか、湖沼や湧泉をともなうのも特徴である。

政子姫は狭名大夫の家柄で、土地の若者とは身分が違うという父大海の反対による悲恋のほかに、錦木塚とは別に毎日の細布織りに潔斎の水ごおりをとったという湧泉伝説を合せもっている。場所は錦木塚に近い錦木字赤沢田（旧古川）の湯沢家跡にある「八紘清水」とよばれるもので、今も絶えることなく湧き水がある。

また細布が縁起伝説にあるように白鳥の鳥毛織という珍貴な産物という実態があったかどうかであるが、これについては「けふのせばぬの」で内田武志氏がその註解に無名抄(121～2年頃)を引用して「鳥毛の布で短かければ上にきることなく小袖などのように下にきるなり」としている。鳥毛の細布では文字通り胸あわずなので、袖なしようのハオリ着でもあろうか、鳥毛織は鶴女房話でも高価で数の限られた珍貴のものであった。また、秋田県では亀田（岩城町）にも昭和の初め頃までゼンマイ織とならんで白鳥織という鳥毛（実際はニワトリの軟毛）織があったことを考えれば、寒冷のみちのくから上納品として特産されたものであろう。

しかし、近世後半には、先の紀行日誌にみられるように、狭布の里の細布として巾５～６寸のカラムシの上布として世上に珍貴の名声を伝えていたのみであった。

菅江真澄が古川村を訪ねたのは天明５年（1785）の秋であったが、稲刈る女より錦木塚の話を聞き、黒沢家に立ち寄り、あるじの話を聞いている。『もはや鳥毛織はなかったが、家の内に注連をはり、織女は湯あみの潔斎をする』などの古風を誌している。

松浦武四郎も嘉永２年（1849）夏の鹿角日誌に黒沢家に立ち寄った見聞を『座敷には注連をまわし他人をいれず、古い織機があり、麻苧（カラムシ）をうむこと（糸をつむぐ）もしており、朝のうちの仕事で、小便大便にたった後はそれらの道具にさわらず仕事も慎しみ、また女は月水（月経）時には仕事を休み、織女も10才から22～23才までが良いとされ老女は織らず、巾は５寸５～６分の布で、錦木塚縁起書も一覧した』と誌している。

古来からみちのくの特産とされた細布をこのような古式にならって伝えた黒沢家をみてみたい。

黒沢家の調査は、私と並行し、あるいは先行して鹿角市教育委員会による調査も行われ、下古川黒沢儀右ヱ門家（現当主義雄氏）から、古い織機一式と細布一反（6寸×2丈6尺）加えて萬書留覚帳等の古文書などの貴重資料が、好意と協力によって明らかになり公開された。

萬書留覚帳は安永5年（1775）から文化7年（1810）にわたって、細布の書留が散見され、いずれも役屋（代官所）などからの被仰付で織りあげて上納しているもので、代金はおおよそ一反に一貫文ということが知られる。また明治期の記録として別に、皇太子殿下御結婚の時に献上しその答礼書が「鹿角誌」に転載されている。

享和二年　正月吉日
細布　三反　正月四日ニ毛馬内御役屋ニ而被仰付二月十日迄ニ相出候様こと被仰付候得共願書相出候而二月十二日ニ右布三反毛馬内御役や江上納仕候
右御代物金二歩被下置候右御代銭ニ而三メ五百文頂載仕候二月廿六日御うけ仕候已上

秋田県鹿角郡　錦木村
黒沢圓次郎
一　狭布細布　　弐巻
右
皇太子殿下御結婚奉祝ノ為メ献納候段御満足被思召候事
明治三十三年五月十日　　宮内大夫侯爵　　中山孝麿　印

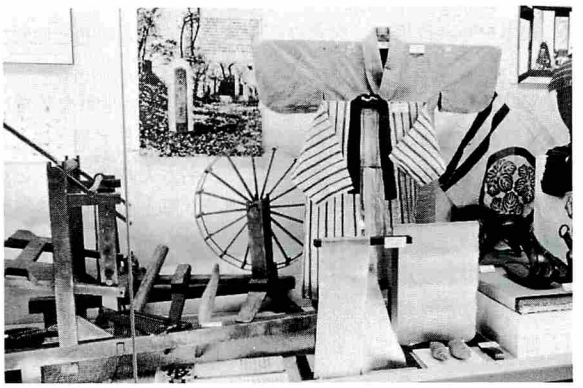
このように明治時代まで確実に黒沢家に伝承されており、まさに錦木塚の細布伝説は生き続けていたのである。

さらに黒沢家の古文書の中でかえりみられなかった系図残欠が一片あって（もちろん後世の書き写であるが、一応巡見使等の年号など一致する部分もある）錦木塚との関係を知るうえで多少参考に思われるのでその部分を付記する。

四十六代　秀直　黒沢弥二郎
慶長七年来奥州鹿角郡古川譜代下人頼古川長作居住ス古川高瀬玄蕃烟意而為聟従是代々住鹿角
四十七代　秀雪　黒沢甚兵衛　母高瀬玄蕃娘
四十八代　秀行　黒沢□□衛門　母高瀬周防娘
寛文七年従公儀御巡見御役人佐々又兵衛殿松平新九郎殿中根宇右衛門殿御通之節毛馬内通古川錦木塚古人被仰付　錦木塚縁起習老夫以書付狭布添上為御褒美銀一枚被下　延宝三年□□見御通之節縁起狭布差上御目録三□疋拝領

展示資料について

中心資料として「生きていた伝説資料」である細布一反をはじめ、織機一式、萬書留覚帳など黒沢家の貴重な資料を借用することができた。



鹿角では近世、近代（明治）まで麻畑がどこの家にもあり、麻布が織られ、着物、フトンなど日常衣類の多くが自給されていたという。（細布とならぶ紫木綿、茜染の下織りは賃機での商品であった）また織布の工夫もあり、山野に自生するゼンマイ棉を混織して、防湿防虫防寒に役立るゼンマイ織など鹿角の手織物の実資料を配置した。

錦木塚については、現地写真パネルと伝説紹介にとどまった。

紅葉樹五種、にしきぎ（衛矛）、染木の伝承と植物については、民俗学的な実体の裏付調査と変遷の充分な解明にいたらなかったので残念ながら展示資料としてとりあげることができなかった。

2 〝錦木塚伝説〟（概要）

古代争乱にあけくれていた鹿角の地に郡司として、都から狭名太夫が下向した。太夫は開発をすすめ、農耕を開き、人心を鎮めて民生の安定につくし、その治績を賞されて古来の地名豊丘里にかえて狭名の一字をあて「狭郡（さなごうり）」とあらためた。

狭名太夫から８代の後裔で古川に住んだ里長大海の一人娘政子姫は気だてもすぐれ容色美しく、布織りの巧者として村娘に機織りを教えるなど評判であった。政子姫の織った布は市日でもひときわ里人の心をひいてもてはやされた。

その頃隣村の草木の里から市日にでて錦木を売る若者がいた。錦木というのは楓木、酸木、桜木、苦木、まきの木の五種の枝木を３尺あまりに切って一束とし、五色の色どり美しい仲人木として売られていたものである。古来から鹿角では縁組の神木として、男が恋い求める女の門口や窓辺にさしかけ、女がこれをとりいれれば、男を受けいれる印とされた。後世もなお五色の紅葉した枝木や、若木の枝を削って五色に染めたものを用いて求愛の印としたと伝えている。

錦木を売る若者は市日に往来する間に政子姫の美しさにひかれ、ついには恋いこがれてわが売る錦木を夜毎に通って姫の屋敷の門口にたて続けるようになったのである。

ところが付近の里村に恐ろしい事件がおきた。それは東方の五ノ宮岳から大鷲が飛びきたって、幼児ばかりをさらってゆくので里人は子守のため仕事も手につかず悲歎にくれていた。ある時、旅の僧がこれを聞き「大鷲から幼児を守るには、その児たちに鳥毛の混じた織布を着せるように」と教えた。里人は鳥毛の織布を求め歩いたが手にはいらなかった。

この話を聞いた政子姫は、人の世の最上の子宝を失う親の悲しみと難儀に心をうたれ、この苦難を救うことを神に祈願して、３年３か月精進潔斎して、赤森の渕の白鳥の鳥毛を求めて苦心を重ねながら、鳥毛織りの布を織って親たちに分け与えることにはげんだのである。

錦木売りの若者は、一日一束、千日千束を積めば恋は成就するという伝えを信じて、日を重ね、月を重ね３年３か月通い続けて千束の錦木を政子姫の門口に積みあげたが、たくましく恋にかがやいた若者はやせ衰えて今はみるかげもなかった。夕べにたって夜明けに帰る草木の里の山道は夜露のたまる間もなく、会えぬ夜の悲しみの涙の顔を洗った、そのあたりの川を涙川と後世に伝えている。

せめて一夜なりとも、わが恋に憔悴した若者の愛を受けたいと政子姫の心は痛んだが、父大海の「わが先祖狭名太夫の家名を守るため故なき里男に稼がせることはできぬ」というきびしい叱りと、鳥毛織りの神願の志に悩み、ひそかにわれらが恋のかなわぬことを若者に知らせたのであった。

若者は、わが恋も、五色の錦木の通い路もこれまでと、悲運をうらんでついに病み死んだ。この悲報を聞いた政子姫の悲歎もはげしく、どっとばかり床について泣きくずれ家人の制止もかなわず、三日三晩泣き悲しんで若者のあとをおって悲恋に死んだのであった。

父、大海も愛娘の悲恋の死に無情の心をうたれて、錦木売りの若者の遺骸をもらい受け、姫の亡骸とともに千束の錦木をも共に埋めて大きな墓を造って、２人の悲恋の死を手厚く弔ったのである。

これが今も鹿角の里に残る錦木塚である。

縁起によれば、神仏信仰の政策対立で蘇我氏に敗れた物部氏と敏達天皇一族の処断で、奥州に配流となり鹿角にかくまわれた五宮すなわち玻離皇子が許されて都に帰った時、狭布（けふ）の細布３百反と砂金を土産に献上してその由来を語った折に、政子姫の悲恋で狭名太夫の家名が絶えたのをおしんで、勅願によって一宇の堂を建立したという。以来、狭布の細布は都への貢物、献上品として名声を得たと伝えている。

あるいは政子姫が里の幼児を大鷲から守るため、わが恋を捨てて創案した鳥毛の織布こそが「けふのせばぬの」の起源であり、この下古川の里にのみ伝えられたともいう。

江戸時代に代々錦木塚の塚守を勤めながら細布を織りあげて代官所に上納を続けた記録を残している、旧錦木村下古川の黒沢家には今も古い織機台と、麻の細布一反(長さ2丈6尺幅6寸)が民俗文化財として保存されている。

錦木は立ちながらこそ朽にけれ　けふの細布　胸合すとき　　能因法師

思ひかね今日立ち初むる錦木の　千束も待たで　逢ふよしもがな　　大江匡房

すでに平安期の歌人は、狭布の里の錦木と細布を歌枕として、詠み伝えていたのである。　（木崎和広）

気 候 と 生 物 ―動物―

当博物館の地域展は最終的には総合展示――各部門を集約し、その地域の自然と人間生活の有機的な関連性を追求し、展示する――を目ざしたものであるが、筆者の受け持った動物部門では、鱗翅類（蝶と蛾の類）の調査を中心として行った。これは次の事由による。

もちろん、鱗翅類以外にも外くの動物が生息しているが、この地域の報告書が少なく、予備的な知識の少ない事、特徴的な種について述べられていない事など短期間の調査では十分な資料の入手が困難と思われ、採集にあたっても比較的容易な鱗翅類を取り上げた。鱗翅類については、すでに報告したように（高橋、1977）、いくつかの報告書があり、特徴的な種も得られており、比較的短期間の調査が可能である。その上、多くの種が二次生産者（幼虫が植物食）であるため、その地域の気候、植生などの環境をよく反映していると考えられることによる。

鹿角市における鱗翅類の調査史の概要や1976年までの採集品のリストはすでに報告した（高橋、前出）。同年までの未同定分、1977年の採集品のリスト、植生との関連、分布型などについては第Ⅱ報以降に譲るとして、次には展示の意図、他の部門との関連性について述べてみたい。

前記したように、その地域の気候や土壌の特性は植物や動物のみならず、その地域に生活する人々の生活――風俗、文化、産業など――に直接に、あるいは間接的に、無意識のうちに影響を及ぼしていると考えられる。したがって、展示で取り上げた全国的な視野からみた４つの鱗翅類の分布パターン、すなわち――

① 北海道、東北北東部および関東・中部山地に隔離分布する型
② 北海道から東北地方の太平洋側に分布、秋田～北陸に分布が欠け、西南日本では中国、九州地方の山岳地帯にのみ分布する型
③ 東北日本の分布は②に等しいが、西南日本では近畿～瀬戸内など乾燥地に分布する型
④ 東北日本の分布は②③に等しいが、西南日本ではいずれの地にも広く分布する型

これらは自然環境によって規制されているが、何らか人間生活との関連性はないか、言いかえると、鱗翅類は自然の中で彼らの順応できる限界まで最大限に分布を広げているが、文化を持つ人類はあらゆる地域に生活圏を広げている。その対応の中に類似した文化の広がりを持っていないかを探ってみたかったのである。

次に述べることがらはかなり単純な発想であるかもしれないが、数例の対応を捜してみた。

第１の分布域に関連がある県（道）は北海道、青森、岩手、群馬、長野などである。自然の影響を最も受けやすい農業を考えると、各県に共通している産物は麦類、りんごなどであろうか。県内の栽培の中心地はやはり鹿角である。横手地方でもりんごの栽培が盛んであるが、着雪による被害が多く、鹿角に比して不向きであるかもしれない。これらの栽培種および鱗翅類の世界的な分布を見ても、寒冷でやや乾燥した地域に限られ、よく一致している。

第２のパターンにあたる産業は肉牛の放牧であろうか。夏山冬里というスイス的な放牧が多く見られる地域である。県内各地でも最近このような形態の牧牛が盛んとなっているが、機械力の導入以後の浅い歴史しか持たない地域が多く、鹿角のように比較的古い歴史の地は少ない。筆者は北野におけるシバ草原で多くの短角牛の放牧を観察した。

第３のパターンはまったく人間生活域の中心地に一致する。日本の古い文化はこれらの地に発展し、明治以降は工業地帯の中心地、太平洋ベルトとして知られ、いち早く新幹線が通ったのもこの地域である。東北日本でもやはり文化の中心帯であった。農産業では瀬戸内から静岡へかけてはミカン、茶の産地として著名である。ここに生活する鱗翅類は人間と同様、温和でやや乾燥した地域を好む種群であり、大都市周辺では分布の空白地が多く、人為的にその生活域を失ったためと推察される。

第４のパターンは雪国文化の欠けた、逆に言えばその文化の必要のない地域である。

前記したように一応の対応を考えたが、まだ論拠も不十分であったため、展示にあたっては鱗翅類の分布論にとどめたが、今後はさらに進んだ形の展示へ脱皮してゆきたい。しかし、このような考えが根底にあることを付け加えておきたい。

（高橋雅弥）

気 候 と 生 物 ―植物―

1. 研究について

鹿角地方は秋田県の東北の隅にあり、交通の上から最も遠隔の地であるため、古くからその植物的自然の実態についての情報量は極めて乏しいものであった。近年地元の同好会組織が自然探索を重ねて実績を得ているが、それらは科学的情報として整理された状態には至っていない。このように鹿角の植物的自然の実態把握が研究の第一目標である。当然その基本的な方向として、鹿角のフロラと植生の追求がまず考えられる。

鹿角のフロラ的研究としては米田（1968）の報告があり、その概要を知り得る。この中で米田はソクシンラン Aletris spicata（Thunb.）Franch. の所産を報告しているが、これは現在に至るまでも極めて隔離的な分布であり、特異な植物分布として注目されている。一方、著者らによる1974年の調査によって、湯瀬のフロラが岩手県と共通する要素があり、今までの秋田県の記録にない種類が存在することから、該地域のフロラに大きな興味がもたれていた。

湯瀬地方が奥羽山脈の低地として植物分布の上でどのような位置を占めるかを明らかにするために第一の研究テーマとしては「湯瀬地方低地のフロラ」をとりあげた。このフロラ構成の中で、果して南部的な要素の植物がどの程度現われるかという事と予想される内陸的な気候要素との関連を追求しようと考えた。

また、大湯川上流の田代平高原の一部北野において、牧場として利用されているススキーシバ草原の谷辺に広範囲のシラカンバ林が成立することを発見したので、その植生概況を調査し、気候要素との関係でその成立について考察することとした。

この他に鹿角全域の踏査による把握を通し、植物標本を採取することによって当館の基礎資料を充実する必要があり、下記の地域で植生や植物相の観察を行った。

○十和田湖畔（発荷～滝の沢）　○白地山　○十和田高原　○大湯黒森山　○菩提野　○安久谷川　○湯瀬全域　○夜明島渓谷　○砂子沢川　○八幡平　○三ノ岱　○黒沢川上流

この中で白地山の山頂付近における中間湿原について、２回にわたり植物社会学的方法による植生調査を試み、20個のアウフナーメ資料を得たが、泥炭断面にテフラ降下の堆積が認められるので、第四紀学的な総合研究が可能と判断し、今後の課題としている。

以下に各研究の結果の概略と将来の展望を簡単に記す。

①湯瀬地方のフロラ

この研究の凡そについては既に報告している通りである（秋田博研報　№.２）。海抜 350 *m*以下の低地の植物として、640種が記録された。従来の県内の小地域フロラとしては男鹿半島・太平山・協和町・八幡平に次ぐ種類数であり、上記のものに比して該当面積が小さいこと、環境の幅が小さいこと、標高差が限られていることなどから、該地域のフロラの豊富さをうかがい知ることができる。原野～林縁の植物・岩壁地の植物・崩壊地性草地の植物などに特徴が見られる。他方、帰化植物や水田雑草は他地域と比較すると著しく少ないと言える。オオトボシガラなど10種は県内では湯瀬以外で発見されていない。しかし、この報告をまとめた後の調査で、春に開花するものを中心として重要な種類の欠落が確認されており、これらはいずれ補遺としてまとめる所存である。

鹿角地方では湯瀬以外でも、花輪盆地の東側山間部とか、大湯黒森山周辺、十和田湖畔の鉛山～銀山付近など興味深い地域があり、これらが地元研究者の手によって探究されることを心から願うものである。

②北野のシラカンバ林植生

この調査についても既に報告している(1975　生物秋田　№19)。シラカンバ林は遷移途中相としての性格をもち、先駆植生として扱われる。従来から中部地方・岩手県・北海道に大きな分布域があり、内陸性気候の標徴的な樹種として、近縁種を含めて考えると世界的な分布を示している。北野における分布は岩手県を中心とした分布図の西北端としての位置づけが可能で、その成立についても同様な解釈が妥当であろうと考えている。植生については北海道・岩手県・武州武尊山との比較を行い、多くの共通点を見い出したが完全には一致していない。地域的な特性を踏まえた種組成のずれであるかどうかはまだ断言できないが、岩手県のシラカンバ林を同じ調査法で調べることによって、北野の特性が明白になってくるものと思う。北野における植生上の興味は天然性草地としてのススキ草地についても大きいものがあるが、その解析はまだ進んでいない。

③白地山の湿原植生

典型的な中間湿原であり、夏季のキンコウカの群生が大変美しい。大きく二つの地域に分けられるが、両方とも種構成はほぼ同じである。ヒナザクラなど雪田要素も一部に見られる。ミズゴケの種類が多く、その点での精査が必要である。ボーリングによる土壌学的な調査、火山灰の分析、花粉分析やC^{14}年代測定など多方面の追求が可能となろう。

鹿角全体としては八幡平を除けば湿原は少なく、低地における湿原も極めて少ない。草木周辺にオオイヌノハナヒゲ・Eriocaulon ・ミミカキグサ類を中心とした低層湿原が２・３あり、調査中である。これらは県内の他地域と特に異なる結果はでていない。

2.　展示について

以上の研究の結果、湯瀬の例で明らかなように、鹿角は日本海指数では秋田市と同じ程度であり、横手市と盛岡市の中間を示すが、年降水量では盛岡市や宮古市に近く、少雨型として県内他地域と区別できる。冬季の積雪が特に少ない事はないので、春から秋にかけての降水量が少ない事になる。また、地質土壌の方面では、古くからの十和田火山の活動により、低地においてはテフラの堆積地形が多く、土壌としての貧養性は明らかである。気候が内陸的であること、即ち気温が低く降水量が少ないことと火山灰土であることが最も顕著に表現されている自然状態として十和田高原北野のシラカンバ林をえらび、県内に一般的なダケカンバと共に材幹を展示した。同林に河畔に多いハルニレが高原で多数のコブニレとなって現われること。スギの植林の他に、カラマツやドイツトウヒの植林が目立ち、他に比して順調に成林していることなどから、これらも材幹や写真で示した。特にハルニレとコブニレについてはその大枝を展示してコルク状となった枝とそうでないものの比較を容易にした。これらについては腊葉標本や林相写真なども補助的に利用した。

土壌や地形条件から従来カヤ場としての利用が多く、現在でも草地として放置されている所が多く、草原植生としては秋田県では寒風山や木地山高原とともに価値ある存在である。これらの中から、スミレ類を中心として、鹿角市の主婦のメンバーにお願いして「原色押花」を作製していただき、９種類を展示した。これらは生時に近い色をそのまま残しており、鑑賞に堪え得る腊葉として好評である。

腊葉標本はできるだけ展示しない方針をとったが、特に珍しく、東日本一円の調査で太平洋側に偏った分布をすると判断されたオオトボシガラなど３種のみは分布図とともに展示した。他に若干のカラー写真をそえた。

（高田　順）

鹿角市北野の
牧場景観

鹿角の画人川口月嶺について

1. 調査について

鹿角地方には近世から現代にいたるまで優秀な画人が数名いる。近世後期から明治時代にかけては、南部藩お抱え絵師川口月嶺とその門人の熊谷月郷、馬渕南渓、田中北嶺が四条派系の作品を残している。明治後期から昭和初期にかけては35歳で夭逝した日本画家柴田春光がいる。また彼と同世代には小坂町出身の日本画家福田豊四郎がいる。周知のように福田は新美術人協会、創造美術協会、新制作協会と美術家団体を結成し、戦前からなくなる昭和45年まで新しい日本画を追究した第一線の画家である。

今回の地域研究・鹿角調査では前述の作家のうち近世末期に活躍した川口月嶺に焦点をあわせてみた。調査の内容は、1、月嶺作品の所在確認と写真撮影　2、描法の検討　3、子孫川口丑吉家（盛岡市）所蔵品の調査が主である。

鹿角市及び川口家で調査した資料は次のとおりである。〔　〕内は所蔵者名、「　」は画題　（　）は参考事項。〔諏訪富多氏〕…「牛」紙本水墨、弘化二年冬為吉田君写川有度、〔浅利昭氏〕…「孔雀」紙本着色、「虎」絹本水墨、「軍鶏」紙本着色　「牛馬」紙本水墨　「三国志人物」絹本着色３幅対　「草花」紙本着色対幅　「鯉」紙本水墨　「動物花鳥画手本」１巻（鶴　亀と寿老人　雀　牛　雁　鯉　網をつくろう老人　蛇　鴨　蛇　桜に雀　紅葉）〔柳館吉弥氏〕…「梅に虎」紙本水墨　「馬」紙本水墨、「登龍」紙本水墨　「寝牛」紙本水墨　「牛」紙本水墨　〔佐藤イサ氏〕…「牛」紙本水墨　「牧童」紙本水墨　「鷹」紙本水墨　「鶏」紙本着色　〔大里ヒデ氏〕…「猿猴」絹本着色　「山水」紙本水墨淡彩対幅　「花鳥」絹本着色　「歳時記」紙本着色12幅対〔高橋克三氏〕…「伝南嶺画手本」1冊（鶴　人物　雀　河豚に瓢箪　鷹狩　婦人　燕　魚　鼠に老人　寿老人　杜若）「月嶺画手本」紙本水墨　「遊鯉」絹本着色３幅対　明治２年　〔奈良東一郎氏〕…「清水寺・不忍池」紙本着色対幅　「声良鶏」紙本着色　「牛」紙本水墨　弘化２年冬　「馬」紙本水墨　「寿老人」　絹本着色〔大里三彦氏〕…「双鶴」絹本着色　甲寅春日（安政元年）　「花鳥」紙本水墨淡彩６幅対（もとは６曲屏風）「神農」紙本着色　〔幸稲荷神社宮司奈良亮一郎氏〕…「馬」「虎」紙本水墨。〔川口丑吉氏〕…「月嶺・月村父子像」川口月泉筆絹本着色、伝「自画像」紙本着色　「月嶺遺品（筆、刷毛、矢立、眼鏡）」「下絵・写生類（景文　南岳　豊彦像、湯瀬村写生図ほか）。

以上の調査にあたっては、鹿角市教育委員会編「郷土の画人川口月嶺」を参考にし、さらに同委員会文化財係長柳沢兌衛氏の助言をいただいた。ここに厚く御礼申しあげる。

2. 月嶺の作品について

月嶺の作品をすべて接見したわけではないが、以上の調査でいえることは、描法がおよそふたつに分けられることである。ひとつは「牛」「馬」などにうかがえるように軽いタッチでしかも筆勢を感じさせるもの。これは水墨である。もうひとつは、「孔雀」「牡丹」にみられるように極彩色で丹念に描写するものである。

画面構成ははとんど粉本構成で、モチィーフは動物花鳥が圧倒的に多い。ただ文久元年に鹿角郡湯瀬村（現鹿角市）の瀑布を写生したものや、「盛岡八景」（盛岡市在）、道中記中の写生などがあり、実写をかなり試みているようだ。その他、「三国志人物図」のような歴史画も描いている。

落款印章は、月嶺　川有度　真象が多いが、なかに判読できない印章もあり今後の調査を必要とする。

3. 展示について

当館美術部門では、昭和53年５月～６月の２月間「一鹿角の画人一　川口月嶺」をおこなう。月嶺の作風を知るための作品を多く展示し、あわせて月嶺その人を知る上で必要な道中記、肖像画を展観する。なお、１ヶ月交替に２回作品を入れかえする。また、「溶鉱炉」福田豊四郎筆を第１展示室前のホールに展示する。

※川口月嶺略歴……1811年（文化８）鹿角郡花輪村に生まれる。本名七之助・直七、幼名栄七、字有度、号月嶺・川有度・真象。1830年（天保元）江戸に上り鈴木南嶺に入門したと伝えられる。帰郷後1846（弘化３）南部藩に仕えながら絵を描く。1871年（明治４）死去、享年60歳。

（太田和夫）

鹿角の工芸

このたび、「伝説のさと鹿角」展を機会に、昭和50年秋よりこのかた、現地への探訪を重ねて、鹿角地方の工芸に関心を寄せている人々、実際制作にかかわりあった人々に直接会って、極力実物資料に触れることに主力を傾注した結果、染織・人形・陶磁器・木工などの制作事実や遺品の所在が、ほぼ明らかになって来た。

＜染織＞

「紫根染」「茜染」は、伝えるところによると奈良時代からのものといわれているが、しかし確たる資料がないのでつまびらかではない。かつて、花輪の小田切家に代々うけつがれていたが、明治末年にドイツから移入された、化学染料に押されて衰退をたどり、絶滅の危機にさらされた。これを黙視できなかった栗山文次郎の献身的な努力によって蘇生された技法が、現在、栗山文一郎にうけつがれ息づいている。山野に自生している紫草を採取する苦労は、なみたいていなことではないようだが、茜草とあわせて天然染料として、鹿角のつつましくも美わしい心情を湛えている。それには媒染剤としてのニシコウリの効能を見落してはならない。繻絆・夜具布団・帛紗・帯・袋物に需用があるが、文様も数種をかぞえる。今日、生地はもっぱら絹中心であるが、以前は木綿が多かったし、麻地に染めたこともあった。生地のちがいによって、染上りの色映えもそれぞれ異なった。

花輪図書館に500余点の、藍染に使用された「染型」が保存されている。明治初年までは、花輪や毛馬内には多くの紺屋があって、街のあちこちで藍染の香りが漂っていたのであろう。「染型」は茶色の古い渋紙でできており、文様も千差万別で同じものはない。突彫・道具彫・縞彫・糸入れなどがそれで、製作地は伊勢の白子や江戸の神田のものが大半で、会津のものもふくまれている。

「細布」については、他の事項で述べてあるので、ここではあえて扱わないことにする。

＜人形＞

「大湯こけし」は、1894年（大正12）に大湯ホテルの主人諏訪富多が、そのころ作並温泉にいた小松五平を、大湯へ招致してはじめたもので、鳴子系ではあったが、いたやかえでを木地に用い、描彩はあやめ模様のものもあったが、数種類の菊花模様のものを多く制作した。また、1949年（昭和24）ごろに奈良靖規が、小松五平の弟子であった奈良吉弥を轆轤師として木地を挽かせ、鳴子系と木地山系の技法を融合させたこけしを創作した。それは「縄文こけし」と呼ばれたが、大湯のストーンサークルから出土した、縄文後期の土偶からヒントを得た名称といわれる。墨色の濃淡を巧みに使いわけ、極彩色を施した描彩は、柔和な円福さを思わせる。小松五平・奈良吉弥の師弟が、1975年（昭和50）に相前後して他界したあとは、いづれも制作が途絶したままになっている。

「木彫風俗人形」は、1928年（昭和３）夏に、院展の彫刻家・木村五郎が、版画家山本鼎の提唱した農民美術運動の主旨を実践するために、大湯で制作指導講習会を開いたのが契機となって、大湯農民美術組合が結成された。作品の種類は、農婦・牛追・ボッチ・毛布・箱橇・俵引など、鹿角地方の風俗をかたどっていて、木地は樺・朴が使われている。制作者もはじめ30名ほどいたが、その中心となったのは、浅井小魚・長谷川義蔵・藤田義高たちであったが、数年にして組合の解散とともに、制作されなくなった。

「小坂人形」は、明治の初期に花巻の人・平賀音之亟が、花巻人形の技法をもたらしたのが発端で、二代目の平賀三蔵は、十和田銀山に煉瓦工として働きながら、小坂人形を作っていたが、のちに毛馬内の瀬田石に移住した。三代目の菊沢陶造は、幼児に父を失ったので、母キチから人形づくりを教えられたという。1928年(昭和３）に七瀧の荒川へ開拓者として入植以来、本格的に制作をはじめ、恵比須・大黒・巴御前・山の神・子守娘・鯛車など、50種以上にものぼった。制作に用いられた土は瀬田石から運んだ。菊沢翁は1976年（昭和51）暮れに、92才で逝去されたあと、この技法を伝える後継者はいなくなった。

＜木工＞

最近になって、花輪でも明治以前から「桜皮細工」が行なわれていたことが判明した。すでにこれまで、合川町の鎌沢、大館市、角館町のものは知られているが、関友三氏によれば、花輪のものはとくに、制作工程の中で桜皮のはぎ目の技法が、ほかのものと比較して異っているという。今後の精査をまって詳報したいと思う。

＜陶磁器＞

「毛馬内焼」「大湯焼」「鹿角焼」などがあるが、すでにこれらのものについては、「秋田県立博物館研究報告」第２号に所載してあるので、省略することにする。

（藤原　茂）

Ⅲ 展示資料リスト

1　鹿角盆地と十和田湖　〔（　）内は年代、「　」内は標本の産地、各1点〕

基盤岩類標本

粘板岩（古生代）「鹿角市湯瀬」、**チャート**（同）「同」、**緑泥片岩**（同）「同」、**結晶片岩**（同）「同」、**準片岩**（同）「鹿角市長谷川」、**輝緑凝灰岩**（同）「同」、**砂岩**（同）「同」、**石灰岩**（同）「岩手県安代町兄川」

新第三系岩石標本

石英安山岩質凝灰岩（中新世・大滝層）「小坂町鉛山」、**石英安山岩質凝灰岩**（中新世・遠部層）「鹿角市熊坂」**溶結凝灰岩**（同）「鹿角市才田」、**溶結凝灰岩**（鮮新世・樫内層）「鹿角市長牛」、**マンガンノジュール**（同）「同」

第四紀火山噴出物標本

溶結凝灰岩（先八甲田カルデラ噴出物）「十和田湖」、**安山岩質玄武岩**（第1期溶岩）「同」、**軽石質火山灰**（第1期軽石流）「鹿角市毛馬内」、**軽石**（同）「鹿角市花輪」、**木炭**（第1期軽石流たい積物）「同」、**安山岩質玄武岩**（第2期火山噴出物）「十和田湖」、**安山岩質玄武岩**（同）「同」、**火山弾**（同）「同」、**軽石質火山灰**（同）「同」、**軽石**（同）「同」、**御倉山安山岩**（第3期御倉山溶岩）「同」、**軽石**（第3期火山噴出物）「発荷峠」、**大湯軽石**（同）「小坂町」、**シラス層モデル**（第3期シラス洪水たい積物）「鹿角市松山」

2　発掘された鹿角

No.	（名　称）	（時　代）	（点　数）	（出　土　地）	（所　有　者）
1	**深鉢形土器**	縄文時代後期	5	鹿角市大湯環状列石	鹿角市教育委員会
2	**片口土器**	〃	1	〃	〃
3	**壺形土器**	〃	3	〃	〃
4	**浅鉢形土器**	〃	2	〃	〃
5	**台付鉢形土器**	〃	2	小坂町杉沢環状列石	小坂町教育委員会
6	**深鉢形土器**	〃	1	〃	〃
7	**浅鉢形土器**	〃	1	〃	〃
8	**壺形土器**	〃	1	〃	〃
9	**土製品**（蓋）	〃	1	〃	〃
10	〃　（〃）	〃	1	鹿角市大湯環状列石	鹿角市教育委員会
11	**鐸形土製品**	〃	2	〃	〃
12	〃	〃	1	鹿角市柴内	鹿角市立花輪図書館
13	**石冠**	〃	1	鹿角市大湯	〃　花輪第二中学校
14	**磨製石斧**	〃	2	〃	鹿角市教育委員会
15	**尖底土器**	縄文時代早期	1	〃	〃
16	**深鉢形土器**	縄文時代前期	1	小坂町内ノ岱狸沢	安保彰氏蔵
17	〃	〃	1	小坂町大谷地	〃
18	**注口土器**	縄文時代晩期	1	鹿角市尾去	海沼寿世氏蔵
19	**壺形土器**	〃	1	〃	〃
20	**壺形土器**（朱塗）	縄文時代後期	1	鹿角市乳牛	内蔵深蔵氏蔵
21	**浅鉢形土器**（朱塗）	縄文時代晩期	1	小坂町館野	小坂町教育委員会
22	**香炉形土器**（〃）	〃	1	小坂町杉沢	〃
23	**台付鉢形土器**	〃	2	鹿角市尾去	県立十和田高校
24	**注口土器**	縄文時代後期	2	鹿角市草木小坂	〃
25	**徳利形土器**	縄文時代晩期	1	鹿角市玉内	浅石勇氏蔵
26	**台付鉢形土器**	〃	1	〃	〃

27	**石鏃**	縄文時代	8	鹿角市大湯	鹿角市教育委員会
28	**石匙**	〃	3		小坂町教育委員会
29	〃	〃	3		鹿角市立八幡平中学校
30	**石箆**	〃	1		小坂町教育委員会
31	**石槍**	〃	1		鹿角市立八幡平中学校
32	**環状石斧**	〃	1		〃
33	**磨製石斧**	〃	3		〃
34	〃	〃	1		小坂町教育委員会
35	**独鈷石**	〃	1		晴沢直視氏蔵
36	〃	〃	1	鹿角市尾去	海沼寿世氏蔵
37	**青竜刀形石器**	〃	1	鹿角市大湯	大里勝蔵氏蔵
38	**石皿**	〃	2	小坂町鴇遺跡	安保彰氏蔵
39	**石冠**	〃	1	〃	〃
40	**石刀**	〃	1	鹿角市乳牛	内藤深蔵氏蔵
41	**石棒**	〃	1		鹿角市立八幡平中学校蔵
42	**磨製石斧**	弥生時代	1	小坂町杉沢	小坂町教育委員会蔵
43	**深鉢形土器**	続縄文時代	1	小坂町内の岱	安保彰氏蔵
44	**長胴甕形土器**	奈良時代	1	鹿角市平元小校庭	鹿角市立平元小学校
45	**杯形土器**（墨書）	平安時代	1		鹿角市立花輪第二中学校
46	**壺形土器**	奈良時代	1		〃
47	**須恵器甕**	平安時代	1		鹿角市立花輪第一中学校
48	〃	平安時代	1	鹿角市十和田末広	小池素市氏蔵
49	**長胴甕形土器他**	奈良時代	4	鹿角市鳥野遺跡	秋田県教育委員会蔵
50	**杯形土器**（墨書）	平安時代	3	鹿角市八幡平遺跡	鹿角市教育委員会蔵

3　館と集落

小枝館出土品（東京大学東洋文化研究所蔵）　〔　〕は点数

鍬先形鉄具〔3〕　**青銅製小鉢**〔1〕　**鉄釘**〔1〕　**鉾先**〔1〕　**青銅製飾具**〔1〕

4　信仰と伝承　〔　〕は点数

板碑〔1〕　―正和二年七月銘―（小豆沢大日堂霊貴神社蔵）　**板碑**―正和二年五月―（谷内神明社蔵）

五輪塔残欠―堆定室町時代―（谷内神明社蔵）

県指定文化財**木造弥陀三尊**〔1〕―堆定鎌倉時代―（恩徳寺蔵）

五大尊舞面〔6〕**五大尊大博士衣裳**〔5〕**五大尊大博士採物**〔2〕（谷内部落蔵）

大里一の庭文書（浅石源太郎氏蔵）

5　村と町のくらし　〔　〕は点数

畑作

南部のめくら暦〔1〕　**ふみすき**〔1〕　（秋田県立博物館）

ふろ鍬〔1〕**からみ槌**〔1〕**まとり**〔1〕**板み**〔1〕**てんじき**〔1〕**はんじょう**〔3〕（蔵鹿角市立花輪図書館蔵）

そば〔1升〕**ひえ**〔1升〕**あわ**〔1升〕（大森久太郎氏蔵）

細布

鹿角市民俗文化財**細布**〔1反〕　**織機**〔1式〕　**萬別帳**〔1〕　（黒沢義雄氏蔵）

ぜんまい織糸〔2〕　**ぜんまい織着物**〔1〕　**手織り麻布**〔1反〕　**麻織着物**〔1〕（鹿角市立花輪図書館蔵）

町のくらし

文机　謡曲　辞典（関久氏蔵）
甲冑　旗　火消装束　くら　あぶみ　化粧箱　そろばん　伊勢屋の印　寛政10年小高帳（山本九郎氏蔵）
小引出し　銭箱　のれん（田村酒店蔵）　**文久３年差引帳　明治２年大福帳**（土館市蔵氏蔵）
文政13年町井家差引帳　天保10年町井家大福帳（奈良寿氏蔵）

6　鉱山
尾去沢鉱山産鉱石標本（各１点）
尾去沢石、黄鉄鉱、黄銅鉱、白鉄鉱、重晶石・菱マンガン鉱、黄銅鉱鉱脈、方鉛鉱・硫酸鉛鉱、方鉛鉱・せん亜鉛鉱、孔雀石、水晶、はん銅鉱、銅藍、自然銅、金鉱（ナルミ鉱）
尾去沢鉱山抗道模型
鉱山作業資料（尾去沢公民館所蔵、秋田県民俗文化財、各１点）
鉱山作業絵巻、ひき臼、がんぎばしご、あてしこ、弁当しこ、弁当箱、えぼ、片口、かっちゃ、片つる、ほっぱみみかき、たがね、せっと、ほりこ、火あかり（５点）、**釜式かんてら、金掘仕事着、掘子仕事着**

7　マタギ　　〔　〕は点数
鹿角市民俗文化財**たて**〔２〕**かんじき**〔１〕**マタギ伝承古文書**〔３〕（湯瀬弥五郎）
硝煙入〔１〕（中村利雄氏蔵）　**火縄銃**〔１〕**あまぶた**〔１〕（青山広吉氏蔵）　**熊の皮**〔１〕（畠山福蔵氏蔵）
マタギ伝承古文書〔２〕**弓矢**〔３〕（柳館吉弥氏蔵）　**守袋**〔１〕（八幡平公民館蔵）
剝製かもしか・熊・むささび・山うさぎ（秋田県立博物館蔵）

8　気候と生物
材幹標本〔（　）内は標本の形態、各１点〕
シラカンバ（幹と半切）、**ダケカンバ**（斜切）、**カラマツ**（幹と板）、**ドイツトウヒ**（幹と板）、**ハルニレ**（幹と大枝）、**コブニレ**（幹と大枝）、**ズミ**、**シナノキ**（半切）
腊葉標本
コブニレ、ハルニレ、シラカンバ、ダケカンバ、オオトボシガラ、ナンブサナギイチゴ、オオバショウマ
原色押花
スミレ、ミツバツチグリ、ニオイタチツボスミレ、アズマギク、オキナグサ、フデリンドウ、オミナエシ、オトコエン、クサボタン
蝶・蛾類標本〔（　）内は標本産地、「　」内は備考、各１点〕
隔離分布型：**フタスジチョウ**（鹿角市湯瀬）、**ヒョウモンチョウ**（岩手県盛岡市）「佐々木明夫氏提供」、**クロヤガ**（鹿角市八幡平）、**ムラサキヨトウ**（鹿角市十和田）、**イイジマキリガ**（同）、**エゾミツボシキリガ**（同）、**カバイロミツボシキリガ**（同）、**マツバラシラクモヨトウ**（同）、**ナシキリガ**（同）、**ミカヅキキリガ**（同）、**ケイギンモンウワバ**（鹿角市大湯）、**オオヒサゴキンウワバ**（仙北郡薬師岳）、**ミヤマキシタバ**（鹿角市十和田）、**ウチキシャチホコ**（鹿角市八幡平（、**ヤマキチョウ**（岩手県盛岡市）「秋田県未知・北海道未知、佐々木明夫氏提供」、**ゴマシジミ**（同）「秋田県未知、中国・九州にも分布、佐々木明夫氏提供」、**オオルリシジミ**（同）「秋田県未知、九州にも分布、佐々木明夫氏提供」、**アオバヤガ**（鹿角市十和田）「九州にも分布」、**シロテンキヨトウ**（同）「同」、**スモモエダシャク**（同）「四国にも分布」、**タンポヤガ**（同）「類似分布、四国・九州にも分布」、**ウスシタキリガ**（鹿角市八幡平）「類似分布」
太平洋側広域分布Ⅰ―西南日本火山性草原分布型―：**スジグロチャバネセセリ**（大館市東台）「鹿角地方未知」、**ホシチャバネセセリ**（岩手町盛岡市）「秋田県未知、佐々木明夫氏提供」、**ハヤシミドリシジミ**（同）「鹿角地方未知、佐々木明夫氏提供」、**アカバキヨトウ**（鹿角市湯瀬）、**ウスシロフコヤガ**（鹿角市十和田）、**ヒメシロシタバ**（秋田市仁別）
太平洋側広域分布Ⅱ―西南日本瀬戸内型―：**ヘリグロチャバネセセリ**（大館市岩神山）「鹿角地方未知」、**ヒカゲチョウ**（宮城県仙台市）「秋田県未知」、**キマダラモドキ**（仙北郡田沢湖町）「鹿角地方未知」、**ヒメスズメ**（鹿角市湯瀬）、**ヒナシャチホコ**（鹿角市十和田）、**ミスジキリガ**（同）、**ホシオビキリガ**（同）、**ウラジロ**

ミドリシジミ（山本郡山本町）「鹿角地方未知、太平洋側広域分布Ⅰ・Ⅱの中間型」

太平洋側広域分布Ⅲ―西南日本広域分布型―：**テングチョウ**（鹿角市湯瀬）、**ウラゴマダラシジミ**（大館市金坂）、**コジャノメ**（宮城県仙台市）「秋田県未知」、**スジグロキヨトウ**（同）、**クロシタキヨトウ**（同）「秋田県未知」、**マダラヨトウ**（鹿角市十和田）、**ヒメアシブトクチバ**（鹿角市八幡平）、**クロモンオオエダシャク**（鹿角市十和田）、**ヒロバトガリエダシャク**（鹿角市湯瀬）「西南日本不詳」、**ウスベニトガリバ**（同）「同」、**ギンモンカギバ**（鹿角市十和田「同」、**マダラカギバ**（同）「同」

太平洋側広域分布Ⅳ―西南日本未知型―：**センモンヤガ**(鹿角市十和田)、**クロフトビイロヤガ**（鹿角市菩提野）、**エゾモクメキリガ**（鹿角市十和田）、**ムラサキハガタヨトウ**（同）、**キバネシロテンウスグロヨトウ**（同）**ヒメオビウスイロヨトウ**（南秋田郡天王町長沼）「鹿角地方未知」、**コウスイロヨトウ**（鹿角市十和田）、**セスジヨトウ**（同）、**ナガキバアツバ**（同）、**クワヤマエグリシャチホコ**（鹿角市湯瀬）、**ウスキヒカリヒメシャク**（鹿角市十和田）

ハルニレ食の蛾類：**シロモンアカガネヨトウ**（鹿角市十和田）、**ケンモンキシタバ**（同）、**シロスジシャチホコ**（同）、**ユミモンシャチホコ**（同）、**ヘリグロマダラエダシャク**（同）、**ミミモンエダシャク**（同）

9　鹿角の画人

川口月嶺

〔資料名〕	〔寸法〕タテ×ヨコcm	〔形状〕	〔資料名〕	〔寸法〕	〔形状〕
月嶺月村父子像	121×50	絹本着色軸装	**自画像**	61×44	紙本着色
馬之図	180×200	紙本水墨額装	**虎之図**	180×200	紙本水墨額装
双鶴図	140×87	絹本着色軸装	**虎之図**	152×85	絹本着色軸装
鶏と牡丹図	140×84	〃	**三国史人物図**	99×34	〃　3幅対
孔雀図	124×57.5	紙本水墨軸装	**軍鶏図**	124×54	紙本着色軸装
声良鶏図	121×50	紙本着色軸装	**牛之図**	51×77	紙本水墨軸装
遊鯉之図	98×35.3	絹本着色軸装3幅対	**猿猴図**	100×36.5	絹本着色軸装
牛之図	116×156	紙本淡彩軸装	**牧童図**	37.5×57	紙本水墨軸装
歳時記	132×30	紙本着色軸装12幅対	**画手本**		紙本水墨1巻
画手本	29×12.5	紙本水墨　1冊	**月嶺遺品**		刷毛、筆、硯ほか
下絵類		湯瀬村写生図他5点			

福田豊四郎

溶鉱炉　355×277.5　紙本着色額装、昭和8年第5回青竜社展

10　鹿角の工芸　　〔　〕は点数

染織

紫根染・茜染〔4〕　**紫根染・茜染関係文書**〔2〕　**にしこおり・紫草・茜草標本**〔3〕（栗山文一郎氏蔵）
染色用型紙〔15〕（鹿角市立花輪公民館蔵）

陶磁器

毛馬内焼〔3〕（内藤ヤス氏蔵）　**毛馬内焼**〔5〕（高橋寛氏蔵　**大湯焼**〔2〕（秋田県立博物館蔵）
大湯焼〔3〕（内藤発二氏蔵）　**鹿角焼**―福田光山作―〔10〕（浅利昭氏蔵）

人形

小坂人形―菊澤陶造作―〔5〕（小坂町中央公民館蔵）　**大湯こけし**―小松五平作―〔2〕（花海きくえ氏蔵）
大湯こけし―奈良靖規作―〔5〕（秋田県立博物館蔵）　**大湯木彫こけし**―浅井小魚作―〔5〕)福田豊太郎氏蔵）
大湯木彫こけし―浅井小魚作―〔3〕（米田博氏蔵）

木工芸

桜皮細工〔5〕（関友三氏蔵）

参考文献一覧

ここには展示にかかわる研究に参考にした文献のみをあげた。配列は一応美術関係、工芸関係、歴史関係、民俗関係、考古関係、生物関係、地質関係の順にし、２つ以上の部門に重複するものは特に関係の深い部門に含ませた。

美術

郷土の画人川口月嶺　鹿角市教育委員会　昭和51年

岩手県史　第４巻　近世編　岩手県

十和田の先輩　十和田町役場経営企画室　昭和47年

芸文とわだ　第２号　鹿角市十和田芸術文化協会　昭和47年

工芸

秋田県史　民俗・工芸編　秋田県　昭和37年

秋田県の文化財（合本）　秋田県教育委員会　昭和47年

鹿角市文化財目録　第一集　鹿角市教育委員会　昭和44年

鹿角のあゆみ　鹿角のあゆみ刊行会　昭和44年

花巻人形（図録岩手の民俗・民芸双書２）　郷土文化研究会　昭和50年

小坂町の文化財　小坂町教育委員会　昭和46年

東北の玩具　日本旅行協会　昭和12年

鹿角焼　奈良東一郎　（芸文かづの第３号）　鹿角市芸術文化協会　昭和52年

鹿角地方のやきもの　藤原　茂　（秋田県博研報第２号）　昭和52年

木彫人形について　藤原　茂　（展示報告「勝平得之の作品と秋田」）　秋田県立博物館　昭和52年

こけし－伝統の美・みちのくの旅－　立風春房　昭和50年

草木染（日本の染織）　山崎青樹等　泰流社　昭和50年

歴史

秋田県史　第３巻　近世編下　「南部藩」　秋田県

秋田県史　第５巻　明治編　秋田県

岩手県史　第５巻　近世編　「盛岡藩」　岩手県

岩手県の歴史　「金上侍の面目」　森　嘉兵エ　山川出版

南部叢書第５冊　「邦内郷村誌」

歴史の中の鹿角上　奈良　寿

民俗

鹿角郡小豆沢大日堂の祭堂　本田安次　（民俗学５－２・４）

秋田小豆沢大日堂の祭堂　松平斎光　（おまつり３）

ダンブリ長者の伝説　石井義雄　（旅と伝説12－３）

鹿角盆地の経済地理構成　佐々木彦一郎　（地理学評論２－８）

山島社会誌－鹿角民俗誌－　佐々木彦一郎　（郷土科学パンプレット第２輯）

ダンブリ長者　八幡源夫　私家版　昭和39年

鹿角誌　内藤十湾　明治文献社　昭和50年復刻

伝説の鹿角　曲田慶吉　明治文献社　昭和50年復刻

新秋田叢書（第３巻）　鹿角郡根元記、鹿角縁起　歴史図書社　昭和46年

松浦武四郎紀行集（上巻）　鹿角日誌、東奥沿海日誌　吉田武三編　冨山房　昭和50年

菅江真澄全集（第１巻）　けふのせばぬの　内田　武・宮本常一編　未来者　昭和46年

歴史の中の鹿角（中）　奈良　寿　昭和52年

黒沢家文書目録　鹿角市教委編　昭和50年

考古
埋蔵文化財発掘調査報告　第二　大湯町環状列石　　文化財保護委員会　　昭和28年
秋田県文化財調査報告書　第一集　秋田県遺跡地名表　　秋田県教育委員会　　昭和38年
館址　　江上波夫　　昭和33年
小坂環状列石墳墓　　小坂環状列石調査団・小坂町教育委員会　　昭和46年
黒森山麓縄文期竪穴群　　十和田町教育委員会　　昭和46年
秋田県文化財調査報告書　第20集　東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書　　秋田県教育委員会　　昭和45年
大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書　　秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会　　昭和49年
大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報　　秋田県教育委員会　　昭和50年
鹿角市文化財調査資料　第6、7号　大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報　　鹿角市教育委員会　　昭和51・52年
秋田県文化財調査報告書　第30集　鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書　　秋田県教育委員会　　昭和49年
秋田県文化財調査報告書　第35集　鹿角大規模農道発掘調査略報　　秋田県教育委員会　　昭和50年
小坂のあけぼの　　安保　彰　　昭和50年
生物
青森県農試　1968　開拓計画基準調査資料　(3)十和田八甲田山麓火山灰土壌地帯　　青森県
岩手植物の会　1970　岩手県植物誌　岩手植物の会
薄井　宏　1958　太平洋－日本海気候域境界における森林植生　日林誌　vol. 40　No. 8　pp.332～342
館脇・辻井　1956　北海道牧野の植物学的研究　根釧原野開発計画調査資料　北海道開発局
石塚和雄ほか　1973　植生図・主要動植物地図　天然記念物緊急調査　3　岩手県　文化庁
松田孫治　1967　秋田県郷土教育資料　生物編　秋田県教育研究所
村松七郎　1932　秋田県植物誌　p.18　秋田師範郷土室
――――　1935　同補遺　植物趣味　vol. 4　No. 2　pp.83－90
山崎・植村　1963　赤石山脈北部の植生（I）　植研　vol.38　No. 9　pp.280－288
Kurata S.　1964　On the Japanese ferns belonging to the Poylstichum polyblepharum group　横須賀市博研報　No.10　pp.17－41
鈴木時夫他　1971　日本海指数と瀬戸内指数　日生態会誌　vol.21　No. 6　pp.252－255
須藤孝久　1971　東北地方のホタルイ類似水田雑草の種類について　雑草研究　vol.20　No. 2　pp.87－88
高田　順　1975　秋田県北野のシラカンバ林　生物秋田　No.19　pp.10－15
――――　1977　秋田県湯瀬地方のフロラ　秋田博研報　No. 2　pp.20－33
高橋雅弥　1972　秋田県の蝶　秋田自然史研究会
農林水産技術会議事務局　1974　飼料作物の品種解説　I、イネ科飼料作物　pp.15―27
畠山宏信他　1954　昭和29年度　秋田県民有林野適地適木調査　説明書　pp. 1 －25及付表　秋田県林業試験場（プリント）
望月陸夫　1972　秋田県植物目録　64P　北陸植物の会
――――　1975　同補遺　北陸の植物　vol.22　No. 4　pp.62―67
山崎　敬　1959　日本列島の植物分布　自然科学と博物館　26　pp. 1 －19
結城嘉美　1972　山形県の植物誌　同刊行会
藤岡知夫　1975　日本産蝶類大図鑑　講談社
地質
秋田県　1973　秋田県綜合地質図幅「十和田湖」「花輪」「碇ヶ関」「大館」及び説明書
河野義礼　1939　十和田火山噴出物の化学的研究　岩石鉱物鉱床学会誌　23巻　6号
久野　久　1953　十和田湖の地質図および説明・模型など　十和田科学博物館蔵
藤原健蔵　1960　米代川流域の河岸段丘と十和田火山噴出物との関係　東北地理　12巻　pp.33－40
渡辺直経　1966　縄文および弥生時代の^{14}C年代　第四紀研究　5巻　pp.157－168
SATOH, H.　1966　Pumice flow Deposits of the Towada Caldera at the vicinity of Kosaka

Town, Akita Prefecture, Japan. Jour. Geol. Soc. Japan vol.72 pp.405－411
白井哲之 1966 米代川流域における含浮石質段丘砂礫層に関する地形学的研究 地理学評論 39巻 pp.802—819
平山次郎・市川賢一 1966 1000年前のシラス洪水～発掘された十和田湖伝説～ 地質ニュース №140、pp.10－28
内藤博夫 1966 秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形 地理学評論 39巻 7号 pp.463－484
——— 1970 秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史 地理学評論 43巻 pp.594－606
谷口宏充 1972 十和田火山の岩石学的研究 岩石鉱物鉱床学会誌 67巻 pp.128－138
中川久夫・中馬教充・石田琢二・松山 力・七崎 修・生出慶司・大沼昭二・高橋 一 1972 十和田火山発達概要 岩井淳一教授退官記念論文集 pp.7－18
大池昭二 十和田火山東麓における完新世テフラの編年 第四紀研究 11巻 4号
——— 1974 十和田火山は生きている 国土と教育 5巻 2号
井上 武・川尻茂三・上田良一 1960 秋田県大館花輪両盆地間山地の地質層序について 秋田大地研報告 22号 pp.10－26
掘越 叡 1960 花輪－小坂地域におけるクロコーの層序的位置 鉱山地質 10巻 pp.300－310
藤本治義・小林二三雄 1961 奥羽地方内帯の古生層について 地質学雑誌 67巻 787号 pp.221－227
上田良一・川尻茂三・井上 武 1961 秋田県花輪盆地東縁山地地質に関する2・3の新知見について 秋田大地研報告 24号 pp.1－11
———・井上 武 1961 秋田県北秋田、鹿角地域の遠部層について 秋田大地研報告 24号 pp.12－21
———・川尻茂三・井上 武 1961 秋田県における鉱床母岩の層位に関する考察－その1．北秋田、鹿角地域－ 秋田大地研報告 24号 pp.22－39
——— 1963 田沢湖周辺山地（桧木内川・玉川流域）の地質層序 秋田大地研報告 28号 pp.1－27
清水 肇・渡辺 操 1964 秋田県鹿角郡南部の鉱化作用（特に尾去沢鉱床区について）その1 秋田大地研報告 29号 pp.1－29
HUZIOKA, K. 1964 The Ariai Flora of Akita Prefecture and the Aniai－Type Flora Honshu, Japan. Jour. Min. Coll. Akita Univ. vol.4 pp.1－105
INOUE, T. and UEDA, R. 1965 On the Hanawa Fault, Akita, Japan. Jour. Min. Coll. Akita Univ. vol.3 №4 pp.1－105
島津光夫・山田敬一・成田英吉・五十嵐俊雄 1965 秋田県相内小坂大湯地域の地質 地調月報 16巻 6号 pp.22－30
水野篤行 1965 花輪盆地周辺山地の第三紀貝化石群 地調月報 16巻 6号 pp.31－36
上村不二雄 水野篤行 1965 秋田県花輪東南方地域の新第三系 地調月報 16巻 6号 pp.1－5
大沢 穠・藤井敬三・平山次郎・沢村孝之助 1965 秋田県花輪町東方脊梁山脈地域、特に花輪鉱山付近の地質について 地調月報 16巻 6号 pp.6－12
角 清愛・角 靖夫 1965 秋田町花輪盆地東縁安久谷川流域の新第三系下部層について 地調月報 16巻 6号 pp.13－21
上田良一 1965 秋田県北部の第三系の層位と造構造運動について 秋田大地研報告 32号
藤井敬三・平山次郎 1967 秋田県大館－花輪盆地間山地の地質構告について 地質学雑誌 73巻 pp.555－561
大口健志 1969 岩手県田山周辺の地質 秋田大地研報告 38号 pp.1－15
鈴木善照・谷村昭二郎・橋口博宣 1971 北鹿地域の地質および構告 鉱山地質 21巻 pp.1－21
高橋 甫・白島賢三・山口 豊・小原 賢 1971 花輪鉱山の地質鉱床について、特に鉱床と地質構造の関係 鉱山地質 21巻 pp.97－103
池辺 穣 1962 秋田油田地域における含油第三系の構造発達と石油の集積について 秋田大地研報告 26号 pp.1－59
渡辺武男 1973 黒鉱鉱床の地球化学に関する2・3の問題点 1973年度地球化学討論会実行委員会